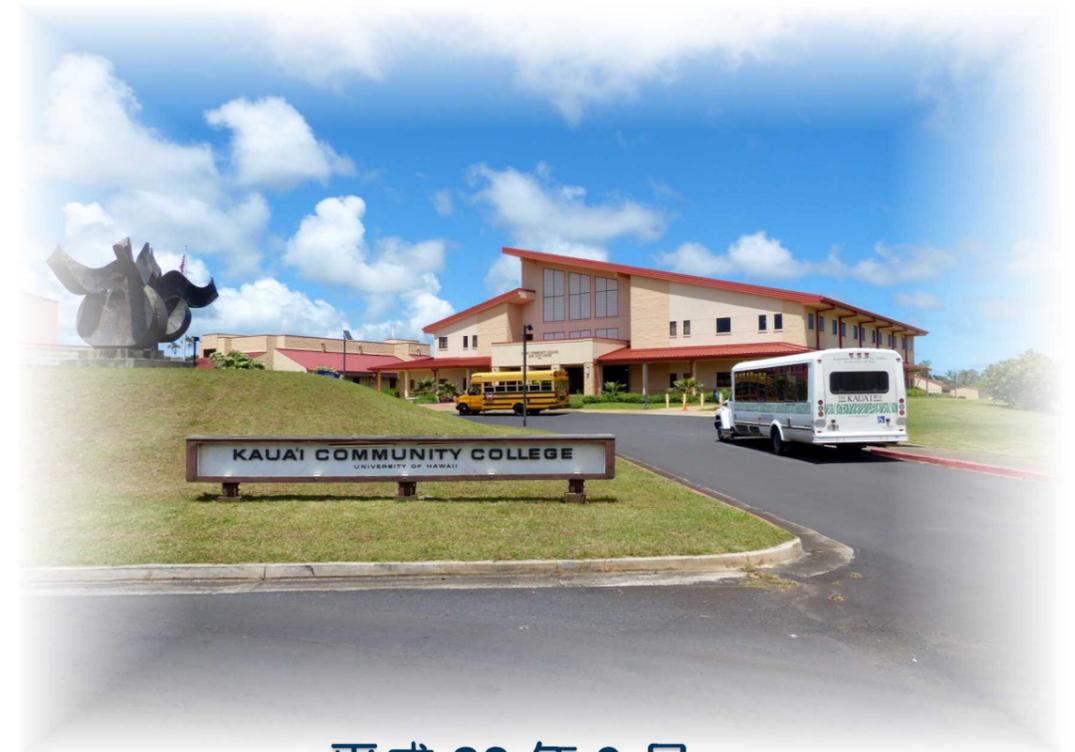


海事人材育成プロジェクト

英語力向上プログラム開発のための  
商船学科専門教員による  
英語外地研修 中間報告  
(平成 25 年度～27 年度)



平成 28 年 3 月

富山高等専門学校  
鳥羽商船高等専門学校  
広島商船高等専門学校  
大島商船高等専門学校  
弓削商船高等専門学校

日本船主協会  
全日本船舶職員協会  
全日本海員組合  
国際船員労務協会

- 平成 28 年 3 月発行
- 大学間連携共同教育推進事業（平成 24 年度採択）
- 平成 25～27 年度 英語力向上プログラム開発のための  
商船学科専門教員による英語外地研修 中間報告
- 編集・発行：鳥羽商船高等専門学校

海事人材育成プロジェクト

英語力向上プログラム開発のための  
商船学科専門教員による  
英語外地研修  
中間報告  
(平成25年度～27年度)

平成28年3月

英語力育成サブプロジェクト

富山高等専門学校  
鳥羽商船高等専門学校  
広島商船高等専門学校  
大島商船高等専門学校  
弓削商船高等専門学校

## 目 次

1. 英語外地研修の目的と概要	1
1-1 目的	1
1-2 概要	1
2. 研修の実施概要	2
3. 研修の成果と最終年度に向けて	3
3-1 研修成果の要約	3
3-2 各年度の成果	4
3-2-1 平成 25 年度	4
3-2-2 平成 26 年度	4
3-2-3 平成 27 年度	5
3-3 最終年度に向けて	6
4. 海事人材育成プロジェクトの概要	7
5. 教員英語外地研修報告集（平成 25 年度～27 年度）	
5-1 平成 25 年度報告集	H25-1～H25-19
5-2 平成 26 年度報告集	H26-1～H26-18
5-3 平成 27 年度報告集	H27-1～H27-16

# 1. 英語外地研修の目的と概要

## 1-1 目的

海事人材育成プロジェクト（4.海事人材育成プロジェクトの概要を参照）における「1.新たな海事技術者に必要な資質の涵養」の目的は、新たな海事技術者の資質として求められる基本的なコミュニケーション能力、基礎的な英語力の育成を試みるものであり、15才から20才の高専・商船学科生に対してTOEICスコア：500程度をゴールとする英語教育プログラムの構築を目指すものである。

商船学科の専門教員による英語外地研修プログラムは、そのサブプロジェクトである「1.1英語力向上プログラムの開発」の一つのプログラムとして企画された事業である。

従来から、外航船舶職員という職業は国際性豊かな感性やコミュニケーション能力が求められる職業である。この傾向は、日本社会におけるグローバル化の浸透に伴って加速している。そのために学生が求められる英語力や国際性は益々重要になってきている。しかしながら、そうした学生を教育する立場にある教員が相応の英語力や国際性を身に付けていたかという点、はなはだ疑問であり、本研修は、そうした現状を鑑み企画されたものである。

本研修は、商船学科・専門科目における英語の利用促進、英語による授業展開を目指して、商船学科・専門教員を対象に実施する。このため、商船学科の専門科目における英語の利用促進、英語による授業展開を目指した商船学科・専門教員の英語外地研修として、国立商船系高専の教員向けに特別にデザインされた英語研修が組まれている。参加教員は、本研修を通じて専門科目における英語の利用と英語による授業展開という目的に応える実践的な英語コミュニケーション能力の向上を目指している。

## 1-2 概要

### (1) 研修期間

毎年9月に2週間～3週間で設定

### (2) 研修場所

ハワイのKCC(Kauai Community College)

### (3) 参加者

各校から1名ないし2名

### (4) 研修プログラム

主なプログラムは以下の通りである。

- ・ コミュニケーション能力の向上
- ・ 英語によるプレゼンテーション技法
- ・ ハワイ文化の理解

また、研修の成果発表として、英語によるプレゼンテーションが課せられている。

## 2. 研修の実施概要

### 平成 24 年度

ハワイの KCC(Kauai Community College)での夏季休暇中（9 月）における 3 週間程度の研修を次年度から開始するプログラムを企画し、年度末までに KCC と協議することにした。

### 平成 25 年度

商船学科専門教員の英語外地研修については、9 月 4 日～9 月 21 日に 3 週間にわたって、KCC で実施した。5 校からの参加教員は 8 名で、英語研修だけでなく現地の人々との交流機会も多く設定され、異文化交流も考慮された充実した内容の研修となった。

### 平成 26 年度

前年の実績を踏まえて 5 月に事前準備会議を実施し、9 月に 14 日間の英語研修を実施した。5 校で参加教員は 8 名で、前年度よりも英語学習を強化した研修となった。

### 平成 27 年度

本年度は、各校 1 名計 5 名の教員を KCC に派遣した。研修日程は 8 月 29 日～9 月 17 日であった。また、平成 26 年度実施総括を踏まえ、事前準備会議を GI-net を使って 6 月 30 日に実施し、出発前にも、準備確認ミーティングを持った。また、以下を作成し、参加者に配布した。

- ・飛行機での移動について
- ・カウアイ生活情報
- ・昨年度の参加者情報
- ・ハワイ語の挨拶など



KCC(Kauai Community College)



授業見学

発表風景

プログラムの一例

Week 2	Aug 31 (Mon)	Sep 1(Tue)	Sep 2 (Wed)	Sep 3 (Thu)	Sep 4 (Fri)	Sep 5 (Sat)	Sep 6 (Sun)
<b>Morning</b>	9:30 – 11:00 <b>Check-in Program Orientation</b> 11:15 – 12:00 <b>Campus Orientation</b>	9:30 – 12:00 <b>Film and Discussion</b> “Great Grandfather’s Drum”	<b>[Field Study]</b> 10:00 – 12:00 Grove Farm Plantation Museum	<b>Class Observation</b> (please select from the list)	9:30 – 10:30 <b>Pronunciation Clinic</b> 10:45 – 12:00 <b>Intro to History of Hawaii</b>	<b>[Field Study]</b> <b>National Tropical Botanical Garden (NTBG)</b>	FREE
<b>Lunch</b>	Lunch at KCC	Networking Meeting	@ Tip Top Cafe	Lunch at KCC	Lunch at KCC		
<b>Afternoon</b>	1:00 – 3:00 <b>English (A)</b> J. Mexia	1:30 – 3:30 <b>English (B)</b> B. Cronwall	<b>[Field Study]</b> 1:00 – 6:00 Heritage Tour of Plantation History G. Hirata	1:00 – 3:00 <b>English (B)</b> B. Cronwall	1:00 – 3:00 <b>English (A)</b> J. Mexia	<b>National Tropical Botanical Garden (NTBG)</b>	FREE

### 3. 研修の成果と最終年度に向けて

#### 3-1 研修成果の要約

平成 25～27 年度までの 3 年間、商船学科の専門科目における英語の利用促進、英語による授業展開を目指して、商船学科・専門教員の英語外地研修を実施してきた。

当研修に参加した商船学科の専門教員は 3 年間で 21 名になった。5 高専・商船学科の専門教員数は 95 名であり、その割合は 22%になる。本プロジェクトの当初の計画では、毎年 10 名ずつ参加し、プロジェクト期間内で約 40%に達することで、これからの商船教育を担う世代の教員を育てたいと計画していたが、そこまで達しなかったことは残念である。

しかしながら、研修に参加した教員は、全員が向上心を持ち、研修で用意されたプログラム等に積極的に参加し、大きな収穫を得た。研修の最後には、英語によるプレゼンテーションを実施し、研修の成果を披露すると共に、研修後の TOEIC スコアは、平成 27 年度までの参加者平均で 65 点上昇するなど、目に見える成果も大きい。

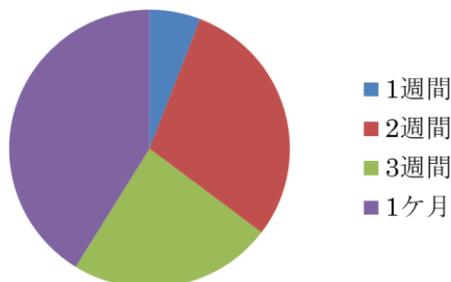
特に、以下の点について、大いなる成果があったと言える。

- ・ KCC での研修は高専にはない教育環境を体感するとともに、アクティブラーニングの概念が自然と授業に導入されていることを知った。
- ・ 参加教員個々が自己の英語能力を把握でき、日常英会話についてはスキルアップできた。
- ・ 専門分野での英語によるプレゼンテーション能力（発表・質疑応答）がある程度身についた。

また、研修参加者へアンケートした結果、研修意義については、100%の参加者が良かったと回答している。なお、研修期間については、1 か月程度が妥当であるという意見が多かった。

帰国後はこの研修成果を、いろいろな形で学生へ還元していることも確認でき、その例を以下に示す。

- ・ 授業中に、簡単なコミュニケーションを英語でしようと考えている。
- ・ 自分の経験を学生に伝えることにより、やれば英会話ができるという意識が学生に伝わり始めた。
- ・ 異文化コミュニケーションについて、学生に伝えるようになった。ハワイの日系移民について考えるきっかけとなり、英語を学習することも必要であるが、一番大事なことは、お互いの文化や歴史に興味を持ち、理解を示すことだと学生に伝えている。
- ・ 新しい環境に身を置くこと、新しい世界を観ることの大切さ、大変だけれどもチャレンジすることが大事であることを伝えるよう意識している。
- ・ 自身の経験をもとに、学生に海外研修プログラムへの参加を積極的に勧めるようになった。



Q 研修期間は、どの程度が妥当と思いますか。

## 3-2 各年度の成果

以下に、各年度における研修の成果と教育研究への活用について、参加教員の報告書から主なものを抜粋しておく。

### 3-2-1 平成 25 年度

#### (1) 研修の成果

- ・ 日常的な英会話に慣れた。
- ・ 英語を勉強していこうという、モチベーションを持つきっかけになった。
- ・ 英語を身近に捉えられるようになり大変有意義であった。
- ・ 英語によるプレゼンテーション能力が向上した。
- ・ 教員と学生がディスカッションしながら行う授業を体験できた。
- ・ ハワイ文化、特にカウアイ島と日系移民による文化の関係を理解できた。
- ・ KCC は国際インターンシップの場として、多いに有効である。
- ・ 本研修に参加した他高専教員や KCC スタッフとの交流は、研修の域を越えて活発であった。これらも本研修における無形の成果である。

#### (2) 研修成果の教育研究への活用に向けて

- ・ 学生に対して異文化体験と英会話の重要性を、身をもって伝えたい。
- ・ ディスカッションを取り入れた授業をこころがけたい。
- ・ 日本とハワイとの特別な関係（日系移民の歴史など）について、教える。
- ・ 復習を英語で行ったり、英語の資料を使用するなど、うまく英語を絡めていきたいと考えている。
- ・ 高度な教材の自主開発に取り組んでいきたいという意欲を改めて強めることができた。
- ・ 専門科目の配布物などに、今後は英語の専門用語や解説を多く取り入れていき、学生たちの英語への抵抗感の低減を図っていきたい。
- ・ 開発中の教材を、グローバル化にも対応できるポテンシャルを有する教育訓練システムへと発展させていきたい。
- ・ 本研修から得られた異なる文化や慣習に触れることからの示唆は、授業において大いに活用したい。

### 3-2-2 平成 26 年度

#### (1) 研修の成果

- ・ 英語に対するハードルが下がり、英語で話す努力をすることができた。
- ・ 英語での質疑応答ができるようになった。
- ・ 自分自身の英語能力を知ることができた。
- ・ ディスカッション等を用いた双方向授業の手法を学ぶことができた。
- ・ 英語を学んでいくことの楽しさをおぼえた。
- ・ 英語の理解というよりは、コミュニケーション（話し手目線ではなく聞き手目線で、惹きつけるような手法）のノウハウを多く学ぶことが出来た。
- ・ 学生に考えさせる機会を多く与える授業方法、学生の想像を促進させる道具に違いが見られたことが、今回の成果であった。
- ・ 研修を通じ何度も自己紹介をし、話を傾聴し、つたないながら会話を繰り返した結果、英会話能力が向上したと思われる。
- ・ KCC のような活発な質疑応答を講義の中に取り入れることができれば、学生の理解度のさらなる向上を図れる可能性があると思われる。

#### (2) 研修成果の教育研究への活用に向けて

- ・ 専攻科の授業において一部英語を取り入れてみることをトライする。

- ・ 帰国後、研修最終日のプレゼンテーションを授業で行い、英語を勉強することは手段であって、最終的な目標ではないことを学生に理解させることができた。
- ・ 外国研修行事への学生引率のノウハウ、また、今後、参加する教員に助言するために必要な情報を得ることができた。
- ・ 英語の勉強のみならず、英語を使った外地での生活全般における研修、かつ、教員としてどのようにスキルアップできるかという点を問われた研修であった。
- ・ ディスカッション等を用いた双方向授業により学生の積極的な授業参加を促したい。
- ・ 教員の使命として『学生が英語を身近に感じる工夫』が必要であると感じた。
- ・ 今後は、コミュニケーション表現の英会話を中心とした授業展開ができることを目指していきたい。
- ・ 授業導入部分（質問形式）が肝心で、早速、授業の導入部分で試してみたが、結果として授業の本題に身が入った気がする。
- ・ 学生に考えさせるだけの時間猶予と課題（材料）を与えるような授業構成にしたいと考えている。
- ・ 専門用語は英語で授業する必要があると感じた。
- ・ 今後は、シミュレーションなどを使用した学生の理解を手助けする方法を積極的に取り入れ、かつ、学生が自ら考える機会を多く与えていきたいと思う。
- ・ 手始めとして本科の卒業研究と専攻科の特別研究の文献調査において学生の負担増にならない範囲で英語資料の読み合わせを行い、技術英語に接する機会を増やすことから手を付けていきたいと考えている。

### 3-2-3 平成 27 年度

#### (1) 研修の成果

- ・ 米国のプレゼンテーションの流儀を知ることができた。
- ・ 自分の思いを、相手にいかにして伝えるかを考え、時には単語だけでも良いから意思を伝える必要があると感じた。
- ・ 必要に迫られると必然的に勉強するものだと、身をもって感じる事ができた。この体験は非常に貴重であり、学生にも当てはまることと考える。
- ・ 到着した日から英語漬けの毎日であり成果は大きいように思う。
- ・ 英語だけの環境に加え、授業で真剣かつ集中して聞き取ろうとする事で、ヒアリング力が向上したと考える。
- ・ 日系の移民の苦勞と活躍に触れる事ができ、現在に至るハワイの歴史を学ぶ事ができた。

#### (2) 研修成果の教育研究への活用に向けて

- ・ 本研修を通じて、英語によるプレゼンテーションの基礎的な構成や留意点のある程度習得することができたため、今後、この知見を活かし、英語による授業展開につなげていきたい。
- ・ 専門用語の英語による表記などから、徐々に英語に慣れていく授業を展開したいと考える。
- ・ 英語によるプレゼン方法、プレゼン技術について学んだので、国際会議などで研究発表する際に活かしたいと考える。
- ・ 今回の研修で得た成果は、学生の会話力、リスニング力の向上は直接役立てることができる。
- ・ 今回の英語圏での研修成果を、校内練習船での実習時に英語を使用した作業指示、並びに、英語を利用した船内コミュニケーションに発揮させたい。
- ・ この経験を活かして、自己の講義に少しずつ英語を取り入れ、また、英会話の必要性を説き、学生の英語力向上に貢献したいと考える。

### 3-3 最終年度に向けて

最終年度においても、商船学科・専門教員の英語外地研修を実施する予定であり、できるだけ多くの教員に参加してもらいたいと考えている。

しかしながら、最終年度における最大の課題は、研修の成果を如何にして学生の英語力向上に反映していくかである。その主な視点は以下の通りである。

- ・ 如何にして学生の英語に対する抵抗感をなくすか。
- ・ 英語の大切さや必要性をどのようにして理解させるか。
- ・ 理解しやすい、親しみやすい教材とは。
- ・ 専門科目の授業の中で、どのように英語を取り入れていくか。

これらを踏まえて、連携機関と協働した学生用英語力向上プログラム開発したいと考えている。このためにも、研修参加教員を含め、専門科目における英語活用法や英語授業法を5校で連携して検討し、最終年度には事例集の作成を計画している。

平成 27・28 年度の研修参加者には、最終年度に計画している第 3 回高専・海事教育フォーラムで成果報告をしてもらう予定である。

また、当研修の継続が必要であることを、連携機関に理解していただき、経費支援を受けられるよう努めたい。

## 4. 海事人材育成プロジェクトの概要

“新たな海事教育システム構築のための高専・商船学科教員研修事業”を含む「海事分野における高専・産業界連携による人材育成システムの開発（通称：海事人材育成プロジェクト）」の概要を以下に紹介する。

海事人材育成プロジェクトは文部科学省の大学間連携共同教育推進事業として平成24年度に採択された平成28年度迄の5年間の教育改善事業である。

### ◆背景

四面を海で囲まれた日本にとって、海運は重要な輸送手段であり、海上輸送は産業の生命線とも言われている。平成19年の海洋基本法の公布を受け、平成20年には海洋基本計画も政府から提言され、安全で安定した海上輸送の確保には海運を担う人材が不足している現況を打破することが急務であり、質の高い海事技術者（船員）の効率的育成の重要性が強く指摘されている。また、近年の海上輸送における技術的変革により、海事技術者（船員）の資格に直接影響を及ぼす国際条約であるSTCW条約（船員の訓練及び資格証明並びに当直の基準に関する国際条約）が改正され、ECDIS（電子海図表示情報装置）やヒューマン・リソース・マネージメント（Bridge Resource Management：船橋におけるチームワーク）の導入なども含むものとなり、海上輸送のグローバル化と技術革新の進展が海事技術者として具備すべき能力を大きく変貌させている。

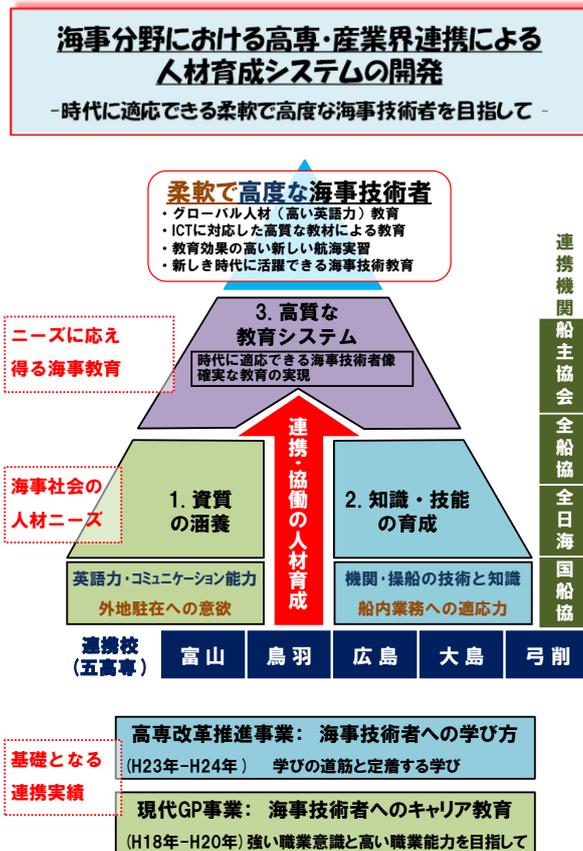
重要であるが対応できないでいる人材育成課題を抱えている海運界において、国土交通省、海運会社、海事関連団体、海事教育機関などの海事分野における産官学が「社会ニーズに応えうる優秀な海事技術者の育成のあり方」について検討を行ない、平成24年3月に、「船員(海技者)の確保・育成に関する検討会報告」をまとめ、新たな海事技術者に必要な資質と知識・技能に基づく海事教育内容の見直し、並びに、海運業界と連携した海事教育の推進などが提言された。

この報告では海運業界が求める海事技術者の要件としてグローバル化に対応した資質と技術革新に対応した知識・技能が求められるとともに、海事分野のステークホルダーとの人材育成上の連携強化が指摘されている。

### ◆概要

海事技術者（船員）を育成する高等専門学校・商船学科などの海事教育機関は、前述の政策と産業界から、質の高い人材を育成し得る教育システムに変革することが求められており、特に、改正された国際条約への対応は喫緊の課題となっている。

本事業は、右図に示すように、上述の報告にある海事分野の方針に従って、商船学科を有する五つの高等専門学校と海事分野のステークホルダーである海事関連団体の日本船主協会、全日本船舶職員協会、全日本海員組合、国際船員労務協会がひとつのチームを構成し、グローバル化に対応した“1. 新たな海事技術者に必要な資質の涵養”と技術革新に対応した“2. 新たな海事技術者に不可欠な知識・技能の育成”に取組み、海運業界が求める時代に適應できる「柔軟で高度な海事技術者」の継続的かつ確実な育成を目指し、海事教育機関である高専・商船学科として必要となる“3. 新たな海事技術者を確実に継続的に育成し得る質の高い海事教育システム”の実現を試みるものである。



海事人材育成プロジェクトの概念図

具体的には、平成 24～28 年度の 5 年間に於いて、次記する 3 種サブプロジェクトを企画・実施し、新たな海事人材を育成し得る質の高い教育システムの開発に取り組み、その成果を海運界、他海事教育機関や他高専に広く紹介するものである。

## ◆プロジェクトを構成する 3 種サブプロジェクト

### 1. 新たな海事技術者に必要な資質の涵養（総括：鳥羽）

新たな海事技術者に必要な資質として基本的なコミュニケーション能力、基礎的な英語力、外地駐在への意欲等が求められている。

鳥羽商船高専と広島商船高専が担当校となって、5 高専・商船学科が船主協会、全船協、全日海、国船協と協働して、これらの資質を身に付け、グローバルな活躍が期待される英語のできる高専・商船学科生の育成法の確立を目指す。

#### 1.1 英語力向上プログラムの開発（担当：鳥羽）

新たな海事技術者の資質として求められる基本的なコミュニケーション能力、基礎的な英語力の育成を試みるものであり、15 才から 20 才の高専・商船学科生に対して TOEIC スコア：500 程度をゴールとする英語教育プログラムの構築を目指す。

#### 1.2 国際インターンシップの展開（担当：広島）

新たな海事技術者の資質として求められる基礎的な英語力、外地駐在への意欲の育成を目指し、18 才の高専・商船学科・4 年生に対して有効で適切な国際インターンシップの展開を試みるものである。5 高専では国際インターンシップを企画・実施しており、商船学科・学生に適したプログラムへの改善、単位化などを行ない、参加者の向上につなげ、定着させることを目指す。

### 2. 新たな海事技術者に不可欠な知識・技能の育成（総括：大島）

新たな海事技術者に不可欠な知識・技能として船舶の機関及び操船に関する基礎的な知識・技能、船舶の業務・生活への適応力が求められている。

大島商船高専と弓削商船高専が担当校となって、5 高専・商船学科が船主協会、全船協、全日海、国船協と協働して、これらの知識・技能を身に付けた、船舶の業務・生活に適応できる高度な知識・技能を有する海事技術者の育成への改善を目指す。

#### 2.1 教科教材の開発、電子書籍化の推進（担当：大島）

15 才から 20 才の高専・商船学科生に適合した教材の不足が指摘されている。新たな海事技術者に求められている船舶の機関及び操船に関する基礎的な知識・技能を、15 才から 20 才の高専・商船学科生に確実に教授するために必要な教材の開発、教材の電子化などの海事教育の学習環境の改善を目指す。

#### 2.2 新しい航海実習の提案（担当：弓削）

高専・商船学科では航海実習として校内練習船実習と 1 年間の大型練習船実習(独立行政法人・航海訓練所に委託)が実施されている。新たな海事技術者に不可欠な知識・技能として求められる船舶の業務・生活への適応力の育成システムの改善を目指し、これらの航海実習について高専・商船学科における教育の高度化、効率向上の視点から検討し、5 高専による大型練習船の共同利用を含む新しい航海実習の提案を試みる。

### **3. 新たな海事技術者を確実に継続的に育成し得る質の高い海事教育システム(総括：富山)**

新たな海事技術者に必要な資質、不可欠な知識・技能として基本的なコミュニケーション能力、基礎的な英語力と外地駐在への意欲、船舶の機関及び操船に関する基礎的な知識・技能と船舶の業務・生活への適応力が求められているが、15才で入学し、20才で卒業する高専・商船学科においてこれらの資質、知識・技能を確実に育成するカリキュラム等の新たな海事教育システムは検討、開発されていない。

富山高専が担当校となって、5高専・商船学科が船主協会、全船協、全日海、国船協と協働して、求められている人材である「柔軟で高度な海事技術者」を確実に継続的に育成し得る協働教育システムの確立を目指す。

#### **3.1 海事技術者像と具備すべき知識・技能の提示（担当：富山）**

求められている人材と具備すべき知識・技能、資質について、高専・商船学科の視点から、再度検討し、諸国及び日本の海事社会の人材現況について調査・解析し、海事社会の人材ニーズと高専・商船学科が育成すべき人材との整合を試みる。

#### **3.2 確実な海事教育システムの提示（担当：富山）**

高専・商船学科教員自らが海事社会における実学の現況を現地調査し、求められている人材と具備すべき知識・技能、資質を把握するとともに、前述の調査・解析に基づき、高専・商船学科が求められている人材を確実に育成し得る海事教育システム、商船学科コアカリキュラム等の開発を目指す。

## 5. 教員英語外地研修報告集

(平成 25 年度～平成 27 年度)

## 5-1 平成 25 年度教員英語外地研修報告集

## 平成25年度 英語外地研修参加者

高専名	役職	氏名
富山高専	教授	中谷 俊彦
富山高専	准教授	笹谷 敬二
鳥羽商船	助教	小田 真輝
鳥羽商船	助教	吉田 南穂子
広島商船	助教	木下 恵介
大島商船	助教	前畑 航平
弓削商船	准教授	野々山 和宏
弓削商船	准教授	向瀬 紀一郎

平成 25 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏 名	中谷 俊彦
所属等	富山高等専門学校 商船学科
1. 研修の目的	
<p>1. 英会話能力の向上</p> <p>2. 専門科目における英語によるプレゼンテーション能力の向上</p> <p>3. KCCにおける授業の体験</p> <p>4. ハワイ文化の理解</p>	
2. 研修の概要	
<p>9月4日（水）午後 リフエ着</p> <p>9月5日（木）午前 KCCオリエンテーション、校内見学 午後 参観授業決定</p> <p>9月6日（金）午前 ハワイアンカルチャー デニス先生 午後 高専説明と自己紹介(KCC教職員へ)</p> <p>9月7日（土）休日</p> <p>9月8日（日）休日</p> <p>9月9日（月）授業参観（各自選択 歴史 哲学） 午後 ホクレア号見学</p> <p>9月10日（火）授業参観（植物学 ブライアン山本先生） 午後 英語研修（ジェフ先生）</p> <p>9月11日（水）Great fathers drum 移民に関するビデオ 午後 英語研修（ブライアン先生）</p> <p>9月12日（木）日系ハワイアン移民の歴史について Miyakeさん 午後 カウアイミュージアム見学</p> <p>9月13日（金）ナショナルボダニックガーデン見学 終日（ブライアン山本先生引率）</p> <p>9月14日（土）練習船交流に携わった方々との交流会 （ハナペペ曹洞宗寺 ブライアン山本先生、ブライアン先生、ジョイス先生、池田さん）</p> <p>9月15日（日）休日</p> <p>9月16日（月）自由研究（9月20日のプレゼンテーションに向けて） 午後 英語研修（ブライアン先生）</p> <p>9月17日（火）自由研究 午後 英語研修（ジェフ先生）</p> <p>9月18日（水）自由研究 午後 英語研修（ブライアン先生）</p> <p>9月19日（木）自由研究 午後 英語研修（ジェフ先生）</p> <p>9月20日（金）午前 英語による各自テーマのプレゼンテーション KCC教職員に対して 「How To Teach Ship's Autopilot System」（中谷） 夕刻 レセプション</p> <p>9月21日（土）午前 リフエ発</p> <p>9月20日の最終プレゼンテーションに向けて、チェックシートによる予行演習も行われ、プレゼンの効果的なやり方、文法チェック等が丁寧に指導された。</p>	

### 3. 研修成果

#### 1. 英会話能力の向上

日常的に英語を使うことによる英会話の慣れ

#### 2. 専門科目における英語によるプレゼンテーション能力の向上

船用自動操舵装置（オートパイロットを英語でわかりやすく教えるための例題、テクニック）

#### 3. ディスカッションを伴うKCCにおける授業の体験

教員と学生がディスカッションしながら行う授業の体験

#### 4. ハワイ文化の理解

特にカウアイ島は日本とのつながりが深く、日系移民の文化がベースにあることを理解した。

以前より、オートパイロットの説明を英語で説明したいと考えており、ポイントを絞った指導が受けられたと感じている。英会話能力が飛躍的に上がったわけではないが、英語によるフィードバックシステム、オートパイロットのわかりやすい説明方法の獲得について、目的は達成されたと思う。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

1. 帰国後の担当授業を意識してスライドを作成したので、オートパイロットの英語での説明をつけて実施する予定。

2. KCCでの授業に倣って、ディスカッションを取り入れた授業をこころがけたい。

3. いずれは遠洋航海に参加する商船学科学生に対して、日本とハワイとの特別な関係（日系移民の歴史など）について、教える予定。

平成 25 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	笹谷 敬二		
所属等	富山高等専門学校 商船学科		
1. 研修の目的			
<p>1. 英会話能力の向上</p> <p>2. 英語によるプレゼンテーション能力の向上</p> <p>3. KCCにおける授業の体験</p>			
2. 研修の概要			
9月4日 (水)	午後	リフエ着	
9月5日 (木)	午前	KCC オリエンテーション 校内見学	午後 参観授業決定
9月6日 (金)	午前	ハワイアンカルチャー デニス先生	午後 自己紹介 KCC教職員
9月7日 (土)	休日		
9月8日 (日)	休日		
9月9日 (月)	授業参観 (各自選択 歴史 哲学)		午後 ホクレア号見学
9月10日 (火)	授業参観 (植物学 ブライアン山本先生)		午後 英語研修 (ジェフ先生)
9月11日 (水)	Great fathers drum 移民に関するビデオ		午後 英語研修 (ブライアン先生)
9月12日 (木)	日系ハワイアン移民の歴史について Miyakeさん		午後 カウアイミュージアム見学
9月13日 (金)	ナショナルボτανニクガーデン見学 終日		(ブライアン山本先生引率)
9月14日 (土)	練習船交流に携わった方々との交流会 (ハナペペ曹洞宗寺 ブライアン山本先生、ブライアン先生、ジョイス先生、池田さん)		
9月15日 (日)	休日		
9月16日 (月)	自由研究 (9月20日のプレゼンテーションに向けて)		午後 英語研修 (ブライアン先生)
9月17日 (火)	自由研究		午後 英語研修 (ジェフ先生)
9月18日 (水)	自由研究		午後 英語研修 (ブライアン先生)
9月19日 (木)	自由研究		午後 英語研修 (ジェフ先生)
9月20日 (金)	午前	英語による各自テーマのプレゼンテーション	KCC教職員に対して
		練習船のハワイ訪問の口伝について (笹谷)	夕刻 レセプション
9月21日 (土)	午前	リフエ発	
<p>英語研修については、9月20日のプレゼンテーションに向けて具体的なものであった。 ブライアン先生、ジェフ先生ともに、大変丁寧にユーモアを交えて授業をしていただいた。</p>			

### 3. 研修成果

1. 英会話能力の向上
2. 英語によるプレゼンテーション能力の向上
3. 日本とは異なり、自由な雰囲気の中での討論を中心とした授業の体験
4. 日常生活を通じての異文化体験
5. 日系ハワイアン歴史と戦争戦後の苦難の理解

目に見えての英会話能力の向上といえるほどではありませんが、プレゼンテーション能力や恐れずに英会話を行う体験ができたことは大変良かったと思います。

また、日系移民の戦争戦後の苦難の歴史を知りそれを実習でハワイを訪れる機会のある商船学科の学生に対して事前に伝えることは重要なことだと感じました。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

1. 学生に対して異文化体験と英会話の重要性を、身をもって伝えることができる。
2. 日本とは異なる討論を中心とした授業を取り入れることは学生の自発的な意欲を引き出すものとして授業に取り入れたいと考えます。
3. 実習に出る商船学科の学生に対して日系移民の歴史を簡単に教えていきたいと考えます。

## 海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	小田 真輝
所属等	鳥羽商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>本研修での目的は、自身の英語能力を高め、授業を英語で行うための英会話力・コミュニケーション能力を身に付けることとした。また、国際交流のプログラムや、自身の研究を進めるにあたっての国際学会の場等でも英語のプレゼンテーションができ、質疑応答やディスカッションができるようになることを目指す。</p>	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>研修はハワイ州カウアイ島にて行われた。KCC での英語の授業を軸に、KCC 学生の授業の参加・見学や、カウアイ島と日本の繋がりを学ぶなど、多くの経験をできるものであった。カウアイ島には日本との関わりが強いことと、海王丸との交流があったこともあり、カウアイ島の歴史についても学ぶことができた。</p> <p>研修期間中のプログラムは決められており、自分で課題・テーマを決め、聞き取りや文献調査、授業観察するものと、その調査の進行や英語での発表に必要なコミュニケーション方法を学ぶもので構成されていた。</p> <p>課題・テーマの例は与えられていたが、研修期間中に体験したことや、日本の文化との比較など、自分で自由に決めることができた。</p> <p>研修は KCC でのみで行われるのではなく、ナマホエ建設現場や博物館、植物園でも行われた。</p> <p>研修最終日には英語のプレゼンテーションが課され、本プログラム関係者及び KCC の職員に対して自分のテーマについて発表を行った。発表後には質疑応答・ディスカッションが行われた。</p>	

### 3. 研修成果

本研修はカウアイ島にて行われることもあり、期間中常に英語を意識し続けるという貴重な経験をすることができた。

KCCでは現地の授業に実際に学生の立場として参加することができ、一般的な日本の学校での授業のスタイルと異なる点を多く見つけることができた。日本の授業との大きな違いとしては、先生が多くの質問を学生に投げかけ、学生たちとディスカッション形式で授業が行われることが印象的だった。

英語の授業に関して、自己紹介の仕方から始まり、他己紹介や研究紹介をするための文章の組み立て方を学ぶことができた。プレゼンテーションの作り方や質疑の対応方法についても学び、多くの簡単な発表を行った。研修期間中のテーマとしてどのような調査を行うかの発表もあり、他の意見を多く取り入れることができた。

カウアイ島にある博物館にも見学に行き、カウアイ島の歴史や日本人との繋がりについても知ることができた。ハナペペでの海王丸を知る地域の方々とのミーティングでは練習船がカウアイ島へ寄港していた頃の話を知ることができた。

最終日のプレゼンテーションでは日本とハワイでの教育制度の違いと就職について発表を行った。プレゼンテーションを作るにあたり、KCCのカウンセラーや就職担当に直接アポイントをとり、話を聞くことができた。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

本研修に参加し、自身の英語能力に自信を付けることができた。英語だけでなく、日本とは異なる授業のスタイルも参考になることが多かった。日本の学生に対していきなり授業を英語で行うのは難しいかもしれないが、復習を英語で行ったり、英語の資料を使用するなど、うまく英語を絡めていきたいと考えている。

海外留学を考えている学生も多く、オフィスアワー等に期間中に行ったイベントや体験したことを話すことで学生たちの英語に対する意識の向上に役立つと考えられる。特にKCCは商船学科の国際プログラムの留学先でもあり、現地の雰囲気を経験することができたため、学生にわかりやすく説明することが可能である。

研修中のテーマとして日本とハワイでの教育制度の違いと就職について調査を行った。ハワイでは幼稚園から高校まで義務教育であることや、就職活動の仕方の違いを学ぶことができた。これらの違いについても学生に説明し、学生の勉学や就職活動に対しての意識の向上に繋がるのではないかと考えている。

## 海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏 名	吉田 南穂子
所属等	鳥羽商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>9月4日～22日に、アメリカ合衆国ハワイ州にあるカウアイ・コミュニティ・カレッジ（KCC）において、商船系高等専門学校の教員を対象とした英語研修に参加しました。私には留学経験がなく、そのため使用している英語は文献等の引用による表現が多く、誤って使用していることが多々あります。そこで、自分が誤解している英語表現を学ぶと共に、単語の羅列ではない会話が少しでもできるようになることを目的としました。さらに、KCCでの授業を見学し、本校での教育と比較することで、今後学生への教育を考える機会としました。</p>	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>1. 英語研修としてのプログラムについて</p> <p>本研修は英語能力の向上を目的として、現地の大勢の方々と交流をする機会が多く設けられていました、多種多様な場面でコミュニケーションを取るために英語を使用することで、英語の能力の向上を図るというものでした。プログラムの内容は、下記の通りです。</p> <p>(1) オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2週間半の研修スケジュールの確認、KCCのキャンパス見学やネットワーク・ミーティング（KCC教職員との顔合わせ）を行いました。</li> </ul> <p>(2) 英語の授業</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>演習が中心であり、プレゼンテーション作成を通して英語での意思伝達方法や表現方法を体得するものでした。例として、参加者同士で他己紹介を行い相手に考えを伝える方法、2つの事柄を比較する方法などがありました。</li> </ul> <p>(3) 授業見学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>KCCの授業の見学を行いました。見学する授業は時間割表を参考に各個人で決定しました。授業形態は日本のような講義形式が少なく、演習形式が中心で講義形式であっても授業中に学生が活発に質問をしていました。また、化学の教科書にインターネットを使用した家庭学習の機能が付属されており、学生の学習結果を教員が確認できるようになっているのが印象的でした。私が見学した授業は下記の通りです。</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 化学</li> <li>② 地球科学</li> <li>③ 公私におけるスピーチ</li> <li>④ 生物</li> </ol> <p>(4) カウアイ島日系移民の歴史</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>現地の日系移民を先祖に持つ方々との交流を行いました。日本人がハワイに移住した背景や現地でどのような扱いを受けてきたのか歴史的経緯、また過去に帆船海王丸がカウアイ</li> </ul>	



写真1：授業風景

島に入港していたことについてお話を伺い新たな知見を得ることができました。

① 日系移民の歴史の講義とカウアイ博物館見学

② Soto Zen Temple における日系移民を先祖に持つ方々との交流会

(5) ハワイの文化交流

- ・ 主に、ハワイの伝統的な航海術を実践するハワイアン・カヌーの見学を行い、その理解を深めました。

③ ハワイアン・カヌーのナマホエやホクレアの見学

④ ハワイの伝統航海術の講義

⑤ 州立植物園の見学

(6) 個人研究

- ・ テーマを各々定めて、KCC の最終日に発表をしました。私のテーマは下記の通りです。

① Safety Management in Experiment and Training for Students in Japan and Kauai

2. KCC について

- ・ 日本の高専とは、主に下記の点での相違あることがわかった。

① 学生は年齢層や背景が様々である

② 日本での生涯学習の機能も含まれている

③ 単位制のため、各学生で登下校の時間が異なる

④ コースにより必要科目や単位数が異なるため、その相談のための職員が存在する

### 3. 研修成果

本研修は2週間半という長期間でありましたが、大島商船の英語研修もほぼ同時期に開催されていました。そのため担当スタッフは多忙であるにも関わらず、常に対応をいただき無事に研修を終えることができました。例えば、個人研究では面談申込先が分からず戸惑っていた際に、担当のスタッフを紹介していただき、自分の研究テーマに関する学生の安全管理について話を聞くことができました。スタッフとの面談では、なるべく文章となるような会話を心掛けコミュニケーションを取ることができるようになりました。しかし、自分のヒアリング能力に合わせて面談をしていただいたので、今後は「聞く」能力の向上が課題と思いました。

最終発表では、英語の授業の中で学んだ対象物を比較するときの発表方法を参考に、発表用のスライドを作成しました。発表は、実習実験の安全管理を調査した理由（目的・動機）、鳥羽商船とKCCの比較（比較対象の紹介）、安全管理上の同意点、相違点、結論という流れで行いました。特に注目した点として、両校とも安全靴や作業着を忘れた場合は実験実習に参加できないこと、日本の教育機関では安全と心の健康を関連づけて考えられていないことを挙げました。もちろん、KCCと本校は規模や学生の年齢層、教育システムが異なるため、単純に比較はできないと感じましたが、この研究を通して、教育システムの違いを見るだけでなく、英語での発表方法を学ぶことができました。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

今回の研修に参加して、研修内容は英語能力の向上だけでなく、自分の意図を相手に伝える能力の向上に主眼を置かれていたと感じました。

また、KCCは職業訓練学校という側面もあり、学生自身がしっかりとした目的意識を持っており、質問や討論などの授業への積極的な参加が認められました。

## 海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏 名	木下 恵介
所属等	広島商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
自身の英語力の向上 及び 研修成果の学生へのフィードバック	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>研修の概要として、大きく分けて次の 4 項目が挙げられる。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>① 「ナマホエ」「ホクレア」見学、カウアイ博物館、植物園、日系人から「海王丸」との交流の聞き取り、等のフィールドワーク</li><li>② KCC での授業見学</li><li>③ 英語の授業（主に、①及び②で得た知見を元にディスカッションを行なう。）</li><li>④ プレゼンテーション</li></ul> <p>研修期間は旅程を含めず 16 日間である。</p> <p>KCC は、州立ハワイ大学傘下のコミュニティカレッジ（2 年制短期大学）である。一般教養科目の他、塗装や溶接などの職業教育、陶芸のような生涯学習のクラスもある。学生の年齢は多様。1,000 人程度の学生が在籍している。</p>	

### 3. 研修成果

2週間半の研修であったが、この研修を受けたことで英語が堪能になるわけではない。しかし、これから英語を勉強していこうという、モチベーションを持つためのきっかけ作りという意味では、有意義な研修プログラムであった。また、現地の人々（特に日系人）との交流を通して、その土地に暮らす人々の歴史や文化を学んで価値観を理解することが、コミュニケーションをとる上で重要であるということを実感できた。英語の学習そのものよりも、むしろこのことによる収穫が大きかったように思う。

異なる国の人間どうしが対話するためには、まず歴史や文化を知り、理解を深めた上でコミュニケーションをとるという手続きこそが重要であり、2週間半の滞在期間中に、それに気づき実践できたことは非常に有意義であった。移民による日系人が多いという点で、研修の場としてカウアイは最適であると言える。

また本研修を通して、KCC 教員から生体工学(Bio-mimicry)についての新しい知見を得ることができた。今後、新たな分野への挑戦として自身の研究にもこれを取り入れる考えである。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

本校（広島商船高専）では、一般教科及び各専門学科において、月に1～2度、英語による授業を行なうこととなっている。本研修をきっかけとして、一層英語に力を入れた質の高い授業を目指す。

また、異文化への理解及び移民についての理解を深める目的で、ハワイへの移民の歴史について、映像資料を視聴するとともに、研修中に得た知見をもとに解説を行なうような授業を実施することを考えている。

平成 25 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	前畑 航平
所属等	大島商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 英語外地研修の参加体験、国際インターンシップの視察。</li> <li>・ 専門性を備える商船系高専の教員の強みと、英語を直接結びつける。</li> <li>・ 専門科目における英語の利用と、英語による授業展開に必要な実践的な英語コミュニケーション能力の向上を目指す。</li> </ul>	
<b>2. 研修の概要</b>	
研修先	： ハワイ州立大学 カウアイ・コミュニティ・カレッジ （米国ハワイ州 カウアイ郡カウアイ島）
研修期間	： 2013 年 9 月 4 日～9 月 21 日（現地滞在：18 日間）
参加者	： 8 名（商船学科所属教員） 富山高専：中谷俊彦 教授、笹谷敬二 准教授 弓削商船高専：野々山和宏 准教授、向瀬紀一郎 准教授 鳥羽商船高専：小田真輝 助教、吉田南穂子 助教 広島商船高専：木下恵介 助教 大島商船高専：前畑航平 助教
概要	： カウアイ・コミュニティ・カレッジにて、英語のみによる講義等の受講。 講義等は「Directed Research」と「English for Professional Purpose」等で構成。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Directed Research 期間中前半は、ハワイの歴史、日本からの移民との関係を切り口に講義を受講。 また、見学や地域交流の一環としてハワイアンカヌー「ホクレア」「ナマホエ」、カウアイ博物館、ボタニカル・ガーデン（植物園）、アレン港、Kauai Soto Zen Temple（禅宗寺）を訪問した。期間中後半は、最終日の発表に向けた資料作成、調査のまとめ等を各自実施。最終日に、1 名約 10 分程度の持ち時間で調査事項等の発表と質疑応答。聴講者として KCC の教職員 20 名程度が出席。</li> <li>・ English for Professional Purpose 聞き取りの仕方や説明資料（パワーポイント等）についての講義を受講。また、同大学の通常の講義を一般の学生に混じっての受講も実施した。</li> </ul>

### 3. 研修成果

- ・ハワイ及びカウアイにおける歴史、文化等を、すべて英語で説明を受けることで、現地の人の目線で見聞きする機会に恵まれた。

通常の海外訪問（見物等）では、旅行者向けに用意された資料（日本語資料）等が用意されている場合があるが、今回の研修では、旅行者向け資料は皆無であり、解説用の日本語資料も一切無かったため、会話・コミュニケーションから得られる情報を頼りに理解することとなり、国際インターンシップとして見た場合、多いに有効であると感じた。

- ・同大学の施設面での充実と活用の実態を体験することが出来た。

多くの講義室で、タッチプロジェクターが設置されていた。学生の板書等を最小限にし、その分、コミュニケーションに重点をおいた講義がなされるよう、ハード面での充実も図られていた。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

今般、英会話のスキルアップの必要性を痛感した。

同時に、知らない英単語をいかにして解釈するか、伝えるか、必要に迫られる場面が多々あった。私個人が感じたヒントとして、英会話のために必要な英単語の解釈力と解説力の習得は、専門である海洋海事についての教育のために必要な専門用語の伝え方（教え方）の習得と、同位と思えた。

英会話時に重宝されるポケット辞書（紙媒体、電子媒体）等、多々、見受けられるが、同様に海洋海事に関するポケット辞書的な用語集、汎用性のあるモノの開発等を念頭において今回の体験を生かして生きたいと考えている。

平成 25 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	野々山 和宏
所属等	弓削商船高等専門学校 商船学科

1. 研修の目的

本研修は、国立商船系高等専門学校商船学科の専門科目における英語の利用促進及び英語による授業展開を可能とする実践的な英語コミュニケーション能力の向上が目的であった。そのため、ハワイ州立大学カウアイコミュニティカレッジ（以下、KCC という）より、国立商船系高等専門学校の教員向けに特別にデザインされた英語研修プログラムが提供された。また、本研修では KCC 教員との共同作業を通して、英語のコミュニケーション能力の向上だけでなく、さらなる KCC と 5 商船高専間の交流を深めることも求められた。

なお、報告者は当初、本研修に参加するにあたり、普段の高等専門学校における教員生活では活用することが少ない英語によるコミュニケーション力の向上を目的としており、合わせて日本とは異なる文化や慣習に触れることで、自身の価値観を再検討したいとも考えていた。すなわち、英語によるコミュニケーションや異文化体験を踏まえて、自身が多角的な思考や多様な視野に気付かされることを期待し、単なる英語研修の域を越えて、今後の教員生活に活かし得る多彩な知見を得たいと考えたのである。

2. 研修の概要

本研修は、2013 年 9 月 4 日から 21 日までの日程で KCC において実施された (photo1)。ただし、報告者は 9 月 4 日（出発のための国内移動日）の台風接近に伴う交通障害により KCC 到着が遅れたため、実質的に 3 日目からの参加となった（報告者は 2 日目午後にカウアイ島へ到着したが、この日は池田コーディネータから研修参加のためのオリエンテーション及びレクチャーを受けた）。



Photo1 KCC Campus

本研修は、参加者が事前に選択した課題やテーマを元に調査を進める“Directed Research”とその調査の遂行や発表等に必要英語でのコミュニケーションに関するレクチャーである“English for Professional Purpose”を大きな2つの柱として実施され、その他にオリエンテーションやイベントが催された。以下、それぞれについて述べる。

### 1. Directed Research

“Directed Research”に関して参加者は研修前に希望するテーマを選択しており、報告者はカウアイ島と海王丸の交流の歴史を調査する“Kaiwo-Maru Oral History Project”への参加を希望していた。本研修の前半では、この“Directed Research”の参考に資するためさまざまなプログラムが用意されていた。それらをテーマ別にまとめると次のようになる。

#### ① ハワイやカウアイ島について

Intro to Hawaiian Culture・Excursion Hokule'a Docks/ Canoe Tour・Kauai Museum Tour・National Tropical Botanical Garden Tour (photo2)

#### ② Japanese in Hawaii (日系人) について

Film: Great Grandfather's Drum・Intro to History of Japanese in Hawaii・Hanapepe Soto Zen Temple Meeting (Kaiwo-maru Project) (photo3)

#### ③ KCC で行われている授業や研究について

Class Observation・Tour of Hydro Plant by Prof. Yamamoto

なお、これらのプログラムを受講するうち、“Directed Research”について新たなテーマを選択した参加者もいた。



Photo2 National Tropical Botanical Garden Tour



Photo3 Hanapepe Soto Zen Temple Meeting (Kaiwo-maru Project)

本研修の後半（3週目）では、午前中が“Directed Research”の時間にあてられ、参加者各自がそれぞれのテーマについて調査研究を行った。報告者はこの時期、カウアイ島と海王丸の交流の歴史について、図書館での資料検索やインターネットでの資料収集を行った。本研修の最終日には、“Directed Research”でまとめた内容を発表する“Final Presentation”が実施され、KCCスタッフが参加した中で参加者の発表が行われた（photo4）。



Photo4 Final Presentation

## 2. English for Professional Purpose

“English for Professional Purpose” は本研修の中盤（2 週目）から開始された。最初は、英語を用いての参加者同士の紹介や Class Observation（授業見学）で感じた KCC と高等専門学校の類似点や相違点の発表等がテーマだった。その際、講師から英語表現としてポイントとなる点やプレゼンテーション全般についての注意点等がレクチャーされた。

本研修の後半（3 週目）では、“English for Professional Purpose” が “Directed Research” についての発表（Final Presentation）準備の時間となり、参加者各自のプレゼンテーション内容について講師からアドバイスが行われた。なお、“Final Presentation” 前日の “English for Professional Purpose” は発表に向けたリハーサルとなり、講師からはその内容のみならず効果的な表現方法等についての指摘があった。その後は参加者各自の個別指導の時間も設けられていた。

## 3. Other

本研修では上記の他に、次のようなオリエンテーションやイベントが催された。

### ①研修開始時・終了時

General Orientation（報告者不参加）・Welcome dinner（報告者不参加）・Farewell Event

### ②KCC について

KCC Orientation・Networking Meeting（KCC スタッフへの紹介や交流）

これらの多彩なイベント等は、本研修をスムーズに進行するための多くの配慮がなされていた。

## 3. 研修成果

本研修における報告者の直接の成果物としては、まず “Final Presentation” で使用したプレゼンテーション（題目：Memorandum on “Kaiwo-maru Oral History Project”）が挙げられる（fig.1・fig.2）。このプレゼンテーションでは、報告者の自己紹介に続いてカウアイ島と海王丸の交流の歴史を概観した後、これらの交流に関する資料が少ないことからオーラルヒストリーによる資料収集の必要性とその際の注意点をまとめ、発表した。これは本研修の大きな 2 つの柱である “Directed Research” と “English for Professional Purpose” を通じた成果といえる。

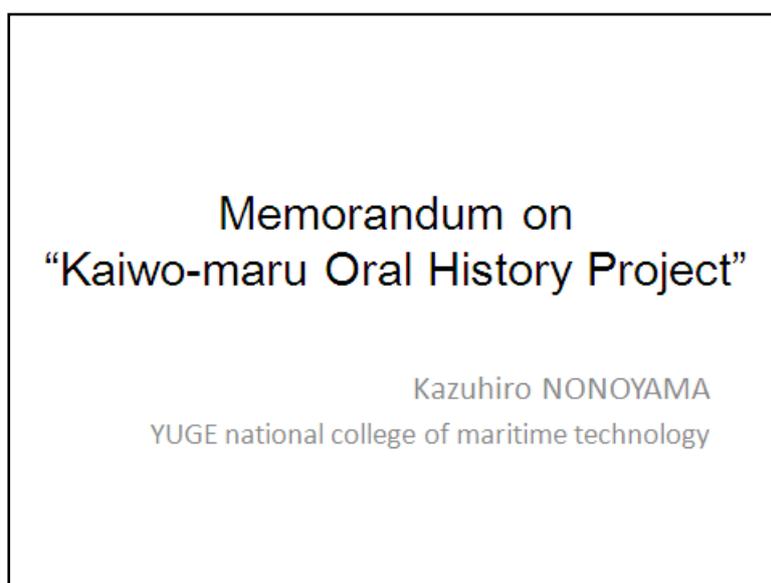


Fig.1 Memorandum on “Kaiwo-maru Oral History Project”

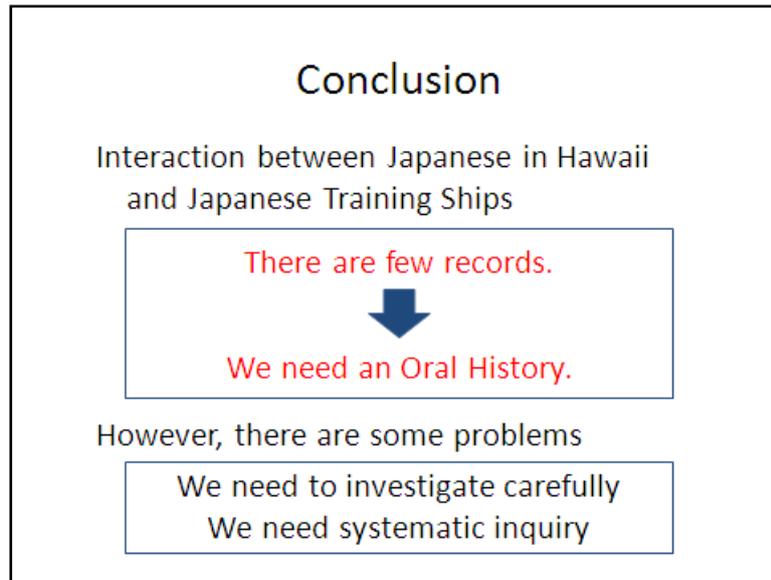


Fig.2 Memorandum on “Kaiwo-maru Oral History Project”

報告者が当初の目的としていた英語によるコミュニケーション力の向上については、TOEICによるスコア向上が成果と考えられる。ただ、報告者は研修前に TOEIC を受験したものの、研修後は本報告書作成時点で諸般の事情により未だ受験しておらず、その成果を確認することができていない。ただ、報告者は本研修参加前から長らく英語に対する苦手意識を持っていたが、本研修に参加したことでそれが改善されたように感じている。特に、“English for Professional Purpose” におけるレクチャーは、講師陣の事前準備もあって、英語を身近に捉えられるようになり大変有意義であった。

また、報告者が期待していた異なる文化や慣習に触れることでの自身の価値観を再検討については、ハワイに暮らす人々のライフスタイルや人種間の差異等から、国際性を考える上でいくつかの示唆を得た。これらは有形の成果物とはなっていないが、今後の教員生活や研究活動を進める上での糧となる。

加えて、本研修の休日にはカウアイ島の各所を訪れる機会を得た。カウアイ島の雄大な自然やおおらかな人々との歓談は、深く印象に刻まれている。また、本研修に参加した他高専教員や KCC スタッフとの交流は、研修の域を越えて活発であった。これらも本研修における無形の成果である。

なお、本研修の終了に際して、KCC から参加者に証明書 (certificate of participation) が授与された。

#### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

報告者は現在、所属校において海事法規や海運経済論（以上は本科）、海洋環境法規（専攻科）等の授業を担当している。これらの授業に本研修での成果をどう反映させるのかが今後の課題となろうが、科目の性格上、カリキュラムの中に加えるには多くの工夫が必要である。ただ、本研修から得られた異なる文化や慣習に触れることからの示唆は、授業において大いに活用したい。

また、研究活動についてはこれまでも文献レビュー等で受動的に英語を用いてきたが、今後はより積極的に英語と接していきたいと考えている。この具体化も今後の課題である。

なお、報告者は所属している弓削商船高等専門学校にて 2013 年 11 月開催予定の教員研究懇談会において、本研修の概要等を報告予定である。

平成 25 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	向瀬 紀一郎
所属等	弓削商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>高等専門学校の商船学科は、日本の産業の生命線とも言われる海上輸送を担う、質の高い海事技術者の育成に取り組んできている。現在、その海上輸送はグローバル化が進行しており、それに伴い海事技術者に期待される資質の内容も変化し、教育機関においても新しい取り組みが求められるようになってきた。すなわち、グローバル化に対応できる能力を具備した人材を育成する先進的な教育訓練システムを、高等専門学校において早急に整備しなければいけない状況である。</p> <p>その取り組みの一環として、商船学科の多様な専門科目と有機的に連携する独創的な英語教育プログラムを開発し、学生の基礎的な英語力と基本的なコミュニケーション能力を涵養することを目指す、組織横断的なプロジェクトが開始された。そのプロジェクトの一環として、商船学科の専門科目を担当する教員たちのための、特別な英語外地研修プログラムが企画された。</p> <p>今回の教員英語外地研修においては、商船学科の専門科目における英語の利用を促進させるべく、教員の実践的な英語コミュニケーション能力を、商船学に関する専門知識とリンクさせながら向上させることが図られた。さらに、カウアイコミュニティカレッジ (KCC) の教員たちと、日本の五つの高等専門学校の教員たちが、互いの専門性を活かしながら共同で作業に取り組むことを通じて、国境やキャンパスを超えた交流の深化と発展が図られた。</p>	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>本研修プログラムの内容は、大きく2つに分類できる。ひとつは、KCC の様々な分野の研究者たちとの共同研究のテーマを個々に探索するプログラムであり、もうひとつは、クラスルームにおいて KCC の英語教員による指導を中心としてコミュニケーション能力を強化するプログラムである。これらは連携しつつ並行して実施され、前者は後者の題材を提供し、後者は前者の手段を提供するものとなっていた。</p> <p>研究テーマの探索に際しては、様々な意欲的なテーマについて、KCC の教員たちから積極的な提案を受けることができた。マイクロ水力発電に関する研究、伝統的なカヌーの建造法や航海術に関する研究、ハワイの日系人の歴史に関する研究、熱帯植物の生態や工学への応用に関する研究などについて、それぞれの専門家や関係者たちによる熱心な説明や実演、また活発な議論があり、強く興味を喚起された。また、KCC の授業風景を自由に視察し、KCC の教員たちと個々にコミュニケーションをとることができた。本報告者は電気工学や数学、化学、生物学の授業を参観した。日本の学校とは異なる双方向的な授業スタイルや、学生たちの高い学習意欲を見て、深く感銘をうけた。</p> <p>英語クラスの受講に際しては、KCC の英語教員たちの非常に手厚い指導を受けることができた。プレゼンテーションやディスカッションを中心とした実践的な講義であったが、自由闊達な雰囲気の中で、双方向的な形式で進行し、外国語への抵抗感を忘れて参加することができた。</p>	

### 3. 研修成果

9月4日の豪雨による、日本国内の鉄道網の混乱の影響で、本報告者は予定よりも1日遅れの9月5日に現地入りした。したがって本報告者は、研修プログラムのうちの一部に参加することができなかったが、しかし非常に高密度なプログラムにより充実した研修を受けることができた。

研修最終日(9月20日)には、KCCの教職員達の前で、新しい研究テーマに関する英語でのプレゼンテーションを行った。本報告者は「Comparison of Textbooks and Educational Aids in KCC and Japan」という題で発表した。内容は、KCCの授業を参観した際に感銘を受けた、KCCで使われている教科書や教材の内容の豊富さについて、また自分が携わっている、海事人材育成プロジェクトの一環として開発中の教材の目標について、比較検討し、より高度な教材を目指すプロジェクトを提案するものであった。

また研修の目的であった英語能力の向上は、TOEICのスコアでも確認できた。研修に参加する前、7月21日に受験した際のスコアは690(リスニング320+リーディング370)であったが、研修後の9月29日の試験の成果は、115ポイント増の805(リスニング365+リーディング440)であった。これを弾みとして今後も英語力の強化に取り組み、さらに高いスコアを目指していきたい。

その向上した英語力を応用し、以前より開発に取り組んできている、機関室ウォークスルーシミュレータを公開するWWWページ(<http://www.center.yuge.ac.jp/~mukose/yugeER/>)に、英語での説明文を記述した。これは弓削商船高専の商船学科の学生たちの専門教育と英語教育に活用されるだけでなく、広く世界で活用されることも期待される、国境を越えたアウトリーチ活動ともなる成果である。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

研修の中で調査したアメリカのカレッジの教科書は、日本の通常の教科書と比べて高価ではあるものの、多くのカラーイラストや写真を含み、さらにインターネットを利用したオンラインホームワークシステムと連携しており、非常に豊かな内容であった。現在、海事人材育成プロジェクトの一部として進行中の、電機系教科書の開発に携わっているが、その我々の教科書とアメリカの教科書との比較は、刺激的な研究であった。調査の過程での、KCCの教員たちとのディスカッションを通じて、多くの新しい知見を得ることができ、今後もより高度な教材の自主開発に取り組んでいきたいという意欲を改めて強めることができた。

研修によってTOEICのスコアアップを実現した経験は、今後は学生たちの受験対策へのアドバイスに活かしていきたい。またKCCの教員たちの授業スタイルを参考に、双方向的な要素を自分の授業にも取り入れていき、学生の興味や学習意欲を喚起する工夫に取り組んでいきたい。また専門科目の配布物などに、今後は英語の専門用語や解説を多く取り入れていき、それらの正しい発音を紹介する機会を増やすことで、学生たちの英語への抵抗感の低減を図っていきたい。

本報告者は以前より研究課題として、学生の自学自習に活用されることを想定した機関室シミュレータの開発に取り組んできているが、今後はその一部に英語のコンテンツも盛り込んでいきたい。それによって、既存の校内練習船実習や専門科目を補強するだけでなく、高度化し、グローバル化にも対応できるポテンシャルを有する教育訓練システムの開発へと、発展させていきたい。

## 5-2 平成 26 年度教員英語外地研修報告集

## 平成26年度 英語外地研修参加者

高専名	職名	氏名
富山高専	教授	山本 桂一郎
富山高専	助教	経田 僚昭
鳥羽商船	教授	鈴木 治
鳥羽商船	准教授	鎌田 功一
広島商船	准教授	内山 憲子
大島商船	准教授	久保田 崇
弓削商船	准教授	二村 彰
弓削商船	准教授	秋葉 貞洋

## 海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏 名	山本 桂一郎
所属等	富山高等専門学校 専攻科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>ハワイ州立大学カウアイコミュニティカレッジ（KCC）で行われる「教員英語外地研修」は、商船学科の専門科目における英語の利用促進、英語による授業展開を目指した商船学科・専門教員の英語外地研修として、国立商船系高専の教員向けに特別にデザインされた英語研修プログラムである。本研修を通じて専門科目における英語の利用と英語による授業展開という目的に応える実践的な英語コミュニケーション能力の向上を目指す。</p> <p>この研修では、英語研修を行うとともに、各自テーマ別に研究を行い、最後に研究発表会で成果を発表する。この研修に参加することにより、自身の英語力の向上や学生へのフィードバックが期待される。</p> <p>海事人材育成プロジェクトの目的のひとつである「新たな海事技術者に必要な資質の涵養」の「英語力向上プログラムの開発」につながる事が考えられる。また、今回の研修のリーダーの役割を与えられた。</p>	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>研修は、現地の歴史的な背景や地理的要因による重要な場所を、ガイドの説明を受けながらめぐるツアー、KCCにおける授業参観、プレゼンテーションに関する授業、最終のプレゼンテーション、現地の方と交流を深めるイベントとに分かれている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ツアーにおいては、長時間にわたって英語でのガイドを聞くため、リスニングマラソンの効果があり耳が開いてくる。質問についてもいつでもできるような状態であり、疑問をその場で解決できるが、英語による質問を即座に考える必要があり、リスニングとスピーキングの強化が図れる。</li> <li>・授業参観においては、現地の授業スタイルを見ることにより、我々の教え方や学生の状況など多くの比較ができる。日ごろの授業に反映できるような方法や教材、授業の進め方など異文化の学校を見ることの効果は大きい。</li> <li>・プレゼンテーションに関する授業においては、英語の授業であるが、日本語でのプレゼンテーションにも活用できるような内容である。どのようにして構成を組み立てるか。どのようにして聴講者の興味を引くか。限られた時間でポイントをどこまで明確にするかなど、大変参考になるものであった。随所で3分間のショートスピーチなど、準備なくスピーキングをする機会も多く、英語に対するハードルを下げるためにも効果のある授業であった。</li> <li>・イベントにおいては、現地の方と自由に交流できるため、いろいろな質問や話を聞くことができた。英語を活用するという目的に照らし合わせれば、きわめて重要な練習の機会であった。</li> <li>・最終プレゼンについては、ある程度準備をした後、卒業式のため帰国した。後日、KCCの先生に内容を送付し確認してもらうことにした。</li> </ul>	

### 3. 研修成果

概要にも述べたとおりであるが、英語に必要な能力をバランスよく学ぶことができる。今回の研修で自身の英語力が向上したかどうかは自分自身ではわからない。しかし、この研修を受講した大きな成果は、英語に対するハードルを下げられたことであろう。カウアイの先生方は日本人の学生との交流も多く経験されているので、こちらのお話を聴いてくれて理解しようとしてくれる。文法がまずくとも発音が悪くとも、何とかコミュニケーションを取ってくれようと努力してもらえる。したがって、私自身も英語で話す努力をすることができた。ここでのコミュニケーションがどこでも通用するとは思っていないが、わからなければ聞きなおすスキルは得られたように感じている。

- ・リスニングについては、長時間にわたっていろいろな解説者の話を聞いて理解しようとしたことによって慣れることができた。

- ・スピーキングについては、積極的に話すことで話せるセンテンスを増やした。しかし、正しいかどうかの検証は不明。

- ・ライティングについては、授業でプレゼンテーション資料を作成することにより練習を行うことができた。

その他、今回の研修のリーダーとして、参加者の英語に対するハードルを下げるために、一生懸命積極的な姿勢を見せたつもりである。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

この研修の成果については、専攻科の授業において一部英語を取り入れてみることをトライする。

例えば、

- ・英語のテキスト資料を、試行的で学生にコピーして配布し、講義に活用する。
- ・英語テキストを参考に英語による授業資料を作成し、講義に活用する。
- ・定期試験問題の一部を英語にする。

などである。この取り組みについては、学生からのフィードバックを、アンケート、感想などで収集することによってさらに今後に活かしていければと考えている。

平成 26 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	経田 僚昭
所属等	富山高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>今回の教員向け外地研修の目的は以下 2 点を目的として設定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語圏での生活による英語力の向上 英語を使ったコミュニケーションについて自分の現状の能力の把握とさらなる向上</li> <li>・カウアイコミュニティカレッジ (KCC) での授業見学による授業の向上 日本においても他の教員の授業を見学する機会は少なく、KCC の授業を見学することで自身の授業向上に向けたヒントをつかむ。また、英語での授業実施を意識したとき、50 分もしくは 90 分の授業時間の使い方や言い回し等がどのようなものを把握する。</li> </ul>	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>平成 26 年</p> <p>9 月 11 日 (木) 富山発→羽田→ホノルル→リフエ</p> <p>9 月 11 日 (木) ホテルチェックイン、研修概要説明、ウェルカムパーティー</p> <p>9 月 12 日 (金) カウアイ島ミュージアム見学、HASHIKAWA 夫妻からのハワイ移民日本人の講話</p> <p>9 月 13 日 (土) NTB (国立植物園) 見学</p> <p>9 月 14 日 (日) 休日</p> <p>9 月 15 日 (月) KCC 授業見学 一日目 (午前：概要説明、午後：英語授業受講、1830～ “Energy” )</p> <p>9 月 16 日 (火) KCC 授業見学 二日目 (午前：ハワイ語学校 KAWAKINI 見学、午後：英語授業受講) 1800～ 富山高専工学系 6 学科学生の国際インターンシップ フェアウェルパーティー</p> <p>9 月 17 日 (水) 0800～ “Science”、 その後、Wilcox ミュージアム、プランテーション工場、移民日本人の集落、Waimea 見学</p> <p>9 月 18 日 (木) KCC 授業見学 三日目 (0830～ “HWST”、午後：英語授業受講)</p> <p>9 月 19 日 (金) 午前：発音レッスン、午後：英語授業受講</p> <p>9 月 20 日 (土) 午前：ナマホエ製作、午後：休暇</p> <p>9 月 21 日 (日) 休日 (山本先生 帰国)</p> <p>9 月 22 日 (月) 午前：スピーチレッスン、午後：英語授業受講</p> <p>9 月 23 日 (火) 午前：スピーチレッスン、午後：英語授業受講</p> <p>9 月 24 日 (水) ファイナルプレゼンテーション</p> <p>9 月 25 日 (木) PMRF (アメリカ軍基地) 見学、1800～フェアウェルパーティー</p> <p>9 月 26 日 (金) 0500～帰国 リフエ→ホノルル→成田</p> <p>9 月 27 日 (土) 羽田→富山着</p>	

### 3. 研修成果

9月11日から27日までの研修のなかで、英語圏での生活はもとより、KCCで実施されている授業の見学、ハワイ文化の学びの場などのプログラムが用意されており、英語コミュニケーション能力の向上だけでなく、授業の向上や異文化理解に通じる研修であった。また、大島商船高専が実施している学生国際インターンシップと富山高専工学系4学科の学生を対象とした国際インターンシップも同時期に実施され、一部合同で用意されたプログラムもあったことから学校・学科を越えた学生との交流の機会が得られた。研修最後のKCCスタッフに向けて行ったFinal Presentationにおいて、研修参加者各自が取り組んだテーマを発表し、質疑応答も含めて、有意義で活発な成果の公表の機会が与えられた。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

これら研修を通じた今後の取り組みとして、英語でのプレゼン力の向上をはじめとし、KCC授業見学によるディスカッション主体の教授方法、特に日本における一般的な授業との相違（生徒数、黒板・スクリーンの使い方、テキストの使い方など）から得られた知見を、各研修参加教員が担当授業や学生プレゼン指導で活かすことで商船学科学生へのフィードバックが期待できる。

平成 26 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	鈴木 治
所属等	鳥羽商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>9月11日～26日のKCC（カウアイ島、ハワイ州）で実施された「教員英語外地研修」に参加した。これは、商船学科の専門科目における英語の利用促進、英語による授業展開を目指した商船学科・専門教員の英語外地研修として、国立商船系高専の教員向けに特別にデザインされた英語研修プログラムである。本研修を通じて専門科目における英語の利用と英語による授業展開という目的に応える実践的な英語コミュニケーション能力の向上を目指している。</p> <p>上記目的に対して、16年前に非英語圏での外地留学の経験後、英語を使う機会がなかったこと、また、英語圏への短期滞在という機会を生かして、普段利用しない英会話の向上と、自身が行う授業での英語の利用を増やすものであった。また、学生の英語学習上でのつまづきやすい点を自ら、英語をネイティブの環境で学ぶことで自覚する。</p>	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>大きく分けて3期に分かれていた</p> <p>前半：学外での見学等を行い、見ること、聴くことを中心にした体験学習</p> <p>中盤：聴くことに慣れたころに、体験したことを自ら話すことを中心にした発表型学習</p> <p>後半：滞在中に得た経験、英語を話すことに躊躇しなくなったところに「プレゼンテーション作成を」中心とする、総合型の学習</p> <p>今回の研修は、大きく分けると、屋外研修、屋内研修、授業参観とに分かれており、前半に野外研修をし、現地の様子を確認しながら、徐々に耳を英語にならし、数日後から屋内での授業参観および屋内研修をしながら、英語を学ぶこと以上に、自分自身の力で学術目的だけのプレゼンテーションではない、スピーチおよび表現力を重視した授業および実習を受講後、短時間の間で、自らが設定したテーマ、結論に基づくプレゼンテーションを行うものであった。</p> <p>各研修は英語そのものの授業・講義・演習ではなく、それぞれの能力にプラスする形のものであったので、それぞれのレベルの違いがあるにも関わらず、それぞれが能力を伸ばすことができた。</p>	

### 3. 研修成果

英語で考えることを積極的に促されたので、その場その場で、専門知識のない人に説明し、時には笑いを得ることのできる英語によるプレゼンテーションを作成できるようになった。

この他、今研修で得られた成果を、以下に示す。

- ・メモなしでの短時間の挨拶をこなせるようになった。
- ・技術的な説明を聞き返すことなしに聞けるようになった。
- ・英語でされている説明の中、聴きたいことを質問できるようになった。
- ・プレゼンテーションに対する質問の意味がわかった。
- ・質問に対する応答を、完全でないものの答えることができた。

その他、研修後半に設定されていた個々のプレゼンテーションを全員で参加することができた。また、グループのリーダーとして、メンバーを無事に帰国できるよう調査および、助言を行い、結果として無事に帰国させることができ、当初の目的を達成することができた。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

帰国後、さっそく、「船舶通信概論」の授業で、研修最終日のプレゼンテーションで作成したスライドを使って授業を行った。

きっかけを作るため、前半は英語で、後半は日本語で解説をつけて行ったところ、学生には好評であり、英語を勉強することは手段であって、最終的な目標ではないことを学生に理解させることができた。その他、下記の事柄がわかった。

外国と日本とでは、プレゼンのスタイルが違う。

内容は日本と同じであっても、構成を変えることで、日本人以外に伝えられる。

引率教員の活動を見ることで、外国研修行事への学生引率のノウハウ、また、今後、参加する教員への助言するために必要な情報を得ることができた。

総じて「英語研修」という英語の勉強のみならず、英語を使った外地での生活全般における研修かつ、教員としてどのようにスキルアップできるかという点を問われた研修であった様に感じている。

現時点での高専では、学生保護者共、日本語ですら通じない場合もあるのが現状であるので、英語の日々での利用は困難ではあるが、経験を生かし、前向きに取り組むことで、現状を打破したいと考える。

平成 26 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	鎌田 功一	
所属等	鳥羽商船高等専門学校 商船学科	
<b>1. 研修の目的</b>		
<p>1. 商船学科専門科目における英語の利用及び英語による授業展開を目標とした、実践的な英語コミュニケーション能力の向上。</p> <p>2. 英語によるプレゼンテーション能力の向上。</p> <p>3. KCC における授業の見学。</p> <p>4. ハワイ文化の理解。</p>		
<b>2. 研修の概要</b>		
9月11日（木）	午後	Lihue着 ホテルロビーにてオリエンテーション
9月12日（金）	午前	Kauai Museum 見学
	午後	HanapepeにてHASHISAKA夫妻の講話を聴講
9月13日（土）	通日	National Tropical Botanical Garden見学
9月14日（日）		休日
9月15日（月）	午前	授業見学 Carpentry /J Carvalho
	午後	授業English(A) /Jeff Maxia
9月16日（火）	午前	授業Introduction to History of Hawaii /Dennis Chun, Kawaikini School見学
	午後	授業English(B) /Brian Cronwall
9月17日（水）	午前	授業見学 Science /B Yamamoto
		引き続き [Heritage Tour of Japanese Immigrants in Hawaii] Grove Farm Sugar Plantation Museum → Tip Top Café → First Sugar Mill Monument → McBryde Wahiawa Camps 2&3 → Glass Beach Cemetery Port Allen
9月18日（木）	午前	授業見学 HWST /Dennis Chun, Japanese /Merritt
	午後	授業English(A) /Brian Cronwall
9月19日（金）	午前	授業Speech/Public Speaking Workshop /Greg Shepherd
	午後	授業English(A) /Jeff Maxia
9月20日（土）	午前	カヌーNamahoeの建造見学
9月21日（日）		休日
9月22日（月）	午前	授業Speech & Presentation Workshop /Dallas McCurley
	午後	授業English(A) /Jeff Maxia
9月23日（火）	午前	発表準備
	午後	授業 English(B) / Brian Cronwall

9月24日（水） 午前 発表準備  
午後 各自テーマの発表「Learn from Mistake / KAMADA」  
9月25日（木） 夕方 Final and Farewell Event  
9月26日（金） 午前 Lihue発

1. 英語の授業はプレゼンテーションに関するテーマが主であった。どの先生もユーモアを交え丁寧に授業をして頂き大変分かり易かった。宿題が出るのが時々あった。また、授業では電子黒板や巨大なポスタイトの使用があり興味深かった。
2. 授業見学では、学生がしっかりと予習（教科書を読む等）をしているのが印象的であった。
3. 発表テーマは「カウアイ（KCC）と日本（商船高専）の比較」と大枠が決められており、具体的な内容は各自が設定した。報告者は「ものづくり」での失敗から学んだことをテーマとし、カヌーNamahoeを建造されているDennis Chun先生にインタビューを行い発表資料を作成し、発表した。

### 3. 研修成果

1. 報告者自らの英語能力を知ることができた。
2. 日常的に英語を使うことによる英会話能力の向上。
3. 英語によるプレゼンテーション能力の向上  
英語による効果的なプレゼンテーション手法を学ぶことができた。
4. KCCにおける双方向授業の理解  
ディスカッション等を用いた双方向授業の手法を学ぶことができた。
5. ハワイ文化の理解  
ハワイ文化や日系ハワイアンについての理解を深めることができた。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

1. 学生に英会話の重要性や異文化体験を自らの経験をもとに話すことができる。
2. ディスカッション等を用いた双方向授業により学生の積極的な授業参加を促したい。
3. 授業において簡単な英語のセンテンスを挿入するなど、積極的に英語を取り入れていきたい。

## 海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏 名	内山 憲子
所属等	広島商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>研修の目的として、英語能力の向上、英語によるプレゼンテーション能力の向上、KCC の授業視察はもちろんのこと、個人的には、ハワイ文化や生活、日系移民の歴史についての知識を得て、カウアイへの興味を深めることである。併せて、トレーニングプログラムを終えた後には、専門科目についての英語による授業展開を目標に、コミュニケーション能力の向上を図る目的がある。</p> <p>また、商船学科学生が国際交流での学びが多い環境であるのかについての視察も兼ねている。</p>	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>プログラム内容を大きく分けて 2 つ用意されていた。</p> <p>1 つは、ハワイの歴史を学ぶ研修内容であり、もう 1 つは、プレゼン発表に向けての英語での授業である。</p> <p>1. ハワイの歴史を学ぶ研修内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Kauai Museum では、カウアイの文化や歴史について学んだ。ハワイ島がどのように形成されたか、かつてのハワイアンがハワイ島でどのように生活していたかなどの知見を得ることができた。</li> <li>● Hanapepe Library では、Kauai Kookie の創始者で、日系 2 世のハンサカご夫婦にお話を伺い、交流を持った。日系移民の生活や苦勞、葛藤などについて、海王丸や日本丸がポートアレンに入港する時をととても楽しみにしていたことについて話してくださった。</li> <li>● National Botanical Garden では、ブライアン先生からハワイの植物の魅力について深く学ぶことができた。参加者に質問して考えさせる講義が印象的であった。</li> <li>● Kauai Coffee では、味わい深いコーヒーを試飲し、広大なコーヒー農園を見学した。</li> <li>● サトウキビ・プランテーション栽培企業を起こした旧ウィルコックス邸でのプランテーション時代の生活を展示している Grove Farm Plantation Museum では、サトウキビ・プランテーションがハワイの歴史に与えた影響について理解を深めた。ハワイらしい住居を見ることができた。</li> <li>● 日系 2 世の Mr. Hirata から、以前に生活をしていたプランテーション・キャンプ (McBryde Wahiawa Camp 2&amp;3) を案内してもらい、質素だが温かい住居を見学させてもらい、ゆかりのある場所への案内もしてもらった。</li> <li>● ハワイの伝統的航海術を実践しているカヌーの Namahoe を見学し、作業の手伝いをさせてもらうことができた。KCC のデニス先生が中心になって少人数のボランティアスタッフで作っているため、製作を始めてから 17 年経っている。来年には進水できる予定とのこと。</li> </ul> <p>2. プレゼン発表に向けての英語での授業</p> <p>Class Observation では、自分の希望する授業を見学することができた。</p>	

専門分野の授業から生涯学習まで、様々なカリキュラムがあり、目的に合わせて講義形式や演習形式をとっている。授業後、多くの学生が意欲的に質問をしているのがとても印象的であった。

英語の授業では、プレゼンテーションに向けての表現方法や伝達方法を学び、プレゼンがより良いものになるようにしていくものであった。

プレゼンでは、日本とカウアイ(ハワイ)との比較を求められ、研修で得た知識での比較、授業の比較、専門分野の比較など、様々な発表がされた。

私は、日系移民の生活と当時の日本人の生活との比較として、「Consideration about the life of the Japanese-immigrant」の発表を行った。

### 3. 研修成果

今回、日系の歴史を中心とした Hawaii や Kauai の歴史や文化を知りたいからこそ、英語で理解し、学びを深めたいということが最大の研修目的であった。

しかしながら、英語で理解し、会話することの難しさをあらためて知った。

最近では、長期に英語に触れ続ける機会が無かったため、英会話に関しては、あまり必要に迫られていなかった部分があった。「聞くこと」は困難でなくても、自分の気持ちを表現できる言葉を「話すこと」はとても難しく、歯がゆさを感じると同時に、最後には、英語を学んでいくことの楽しさをおぼえた。

これを機会に英会話のスキル向上を目指していきたいと考えている。

まずは、商船学科が遠洋航海へ出向く Hawaii を知るきっかけとして、日系移民の生活について、英語で授業を行うことを目標にしたい。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

まず、教員の使命として『学生が英語を身近に感じる工夫』が必要であると感じた。

本校では、教員研究室や教室、実験室などに英語表記を加えている。また、専門科目や英語以外の授業の中でも英語の授業を取り入れることや、試験の際に英語の問題を必ず出題することが義務付けられているが、それだけでは身近に感じることは不可能である。

実際にコミュニケーションがうまく取れた時の喜びが、よりうまく表現したい気持ちに繋がり、英語を身近に感じるきっかけに繋がっていくと思われる。

現在、本校では、英会話中心の授業は殆ど行われていないようである。今後は、コミュニケーション表現の英会話を中心とした授業展開ができることを目指していきたい。

平成 26 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	久保田 崇
所属等	大島商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
本研修の目的は、我々商船学科の教員の授業・実習における英語の利用促進、英語による授業展開を目指し、総合的な英語コミュニケーション能力の向上を目指すものである。	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>平成 26 年 5 月 11 日（日）に参加者による事前打ち合わせ会議が開催された。</p> <p>平成 26 年 9 月 11 日（木）から 9 月 26 日（金）まで KCC 教員英語外地研修に参加した。以下、詳細を述べる。</p> <p>平成 26 年 9 月 11 日（木） 1930 成田集合、2130 成田発、1000 ホノルル着、1300 リフエ着。1530 頃ホテル plantation hale 着後、夕刻 1800 頃より、研修中である富山（本郷キャンパス）、大島の学生および引率教員、KCC スタッフ参加のもとウエルカムディナーで饗された。なお本研修ではリーダーの下、夜必ずミーティングを開き、翌日の行動確認を行った。</p> <p>9 月 12 日（金）0920 にホテルロビー集合後、大島、富山学生と共にカウアイミュージアムに向かった。ミュージアムにはカウアイ王族の歴史やミクロネシアを行き来したカヌーや当時の人々が生活に使用していた食器などが展示されており、また別コーナーでは移民の歴史そして当時の移民の部屋を再現した展示があった。午後にはアレン港側のハナペペ図書館に移動し、日系 2 世である Hashisaka 夫妻の公演を聴講した。公演では第 2 次世界大戦時における日系人の立場や状況などを知ることが出来た。9 月 13 日（土）は 0900 にホテルを出発し、国立植物園を見学した。植物園の規模は巨大でバスでの移動であったが、半日動き回ったが全てを見て回ることは出来なかった。9 月 16 日（日）休日（ワイメア溪谷）</p> <p>9 月 15 日（月）0800 頃に KCC の OCET105 に集合し、各人の KCC のクラス視察について、プレゼンテーションの発表内容についての打ち合わせを行った。その後午前は個人でのクラス訪問となった。控室として OCET103 が与えられた。1200 より KCC 図書館 2 階にて富山の学生のプレゼンテーションそして大島学生の自己紹介を見た後、午後から英語 A（講師：J. Mexia）の講義が始まった。講義は自己紹介から始まり、早い段階でプレゼンテーションの構成の手順の話となった。講義は予定通り 1515 には終了した。（以後の講義もほぼ予定通りの時間で終了している。）9 月 16 日（火）0930 よりホクレア号の船長である Denis 氏によるハワイ文化歴史の講義を 1 時間程度受けた後、KCC 構内に併設された Kawaikini 学校を訪れた。同校はハワイ語で授業を行う学校で、小学生から上は 25 歳まで在籍しており、ハワイ式の歌とハグで出迎えてくれた。算数と音楽の教室を見学した。午後は英語 B（講師：B. Cronwall）の授業があり、英語 A 同様、自己紹介の後、英語 A 同様、プレゼンテーション手法の講義がなされた。9 月 17 日（水）はハワイの名門である WILCOX 家の生家を開放したグループ農園博物館に見学を訪れた。日系 3 世である hirata 氏が終日アテンドしてくれた。午後はカウアイコーヒーセンター側のマクブライド WahiawaCamp を訪れ、hirata 氏の祖父母が生活していた Camp 跡地を見学した。またその後アレン湾側の日本人移民が祀られた墓を訪れ、池田恭子さんもホームステイしていた higashi-honganji を訪れた。ワイメアの街（isihara</p>	

マーケットなど)を散策し、夕食を取った後、2200 頃ホテルへと帰った。

9月18日(木)午前中は各々の希望したクラスの見学を行い、午後は英語Bの授業があった。9月19日(金)午前中はスピーチと公衆の面前で話す際の技術を学んだ。講師のShepherd氏は鎌倉で在日経験もある方で、演劇の先生であった。また午後は英語Aの授業であった。9月20日(土)建造中であるカヌー「ナマホエ」の見学および作業(ブーム磨き、ニス塗り)を行った。9月21日(日)休日(キラウエア灯台)

9月22日(月)午前中はDallas氏のスピーチの授業であった。前回の授業と異なり、聴衆の引きつけ方(視線・話し方)など具体的に教わった。午後の英語Aの授業ではプレゼンテーション要旨について個人レッスンを受けた。9月23日(火)はプレゼンテーションの予行練習をしながら、スライドの修正を行い、発表を詰めていった。一人あたりの発表にかかる時間が30-45分を要したため、午後の英語Bも引き続き予行演習となった。9月24日(水)午前中は各人プレゼンテーションの準備を行い、1200よりKCC OCET104にて最終プレゼンテーションが行われた。一人当たりの持ち時間は5分であったが、大幅にオーバーし、最終的にプレゼン終了時間は30分ほど延長した。9月25日(木)自由(ポリハレミサイル基地見学)9月26日(金)0500ホテル発、0730リフェ発、1300ホノルル発、1630成田着、1745各自解散。

### 3. 研修成果

本研修は17日間の日程のうちKCCでの研修は2週間程度であるため、英語の講義はプレゼンテーションの表現のみに留まったが、そのアプローチは非常にユニークであった。KCCの講義は、質問(昨日何をして、どのような事が印象に残っていましたか?等)から始まり、長い時間を費やす。質問は全員に当たるため、答えが重複しないようにその回答者の英語に注意を注がなければならず、同時に自分の回答を考えるため常に頭をフル回転させていた。またメインの部分では、今まで習うことが出来なかった英語プレゼンの作成や言葉の使い方などをマンツーマンで習うことができた。講師は二人いたため多少教え方が異なっていたものの、アメリカ人がどのような表現を好むのかを知ることができた。またスピーチの講義を演劇の先生がおこなったり、どれも新鮮であった。本研修では、英語の理解というよりは、コミュニケーション(話し手目線ではなく聞き手目線で、惹きつけるような手法)のノウハウを多く学ぶことが出来た。またKCC内での研修以外の活動でも常に英語で話すチャンスを与えられた。例えば、スタッフの家に招かれたときでも、今まで遠慮しがちで話しかけることが難しかったような場面で、話せるようになったと感じることが出来た。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

KCCで大いに教育研究に活かそうと思ったことが2つある。一つ目は先の項目で述べた授業導入部分(質問形式)である。早速、小職の授業の導入部分で試してみたが、結果として授業の本題に身が入った気がするが、今後の実践で検証していきたい。もうひとつは、PBL(Problem Based Learning)である。近年、日本でも、大学・高専で取り入れられているが、ファイナルプレゼンテーション時に、「PBLについて知っているか?」とスタッフに聞いたときに「知っている」とのことであったので、KCCはPBLが出来ていると感じた。実際に授業訪問をした際にも、KCC学生の自己問題解決能力は目を見張るものがあったので、小職も学生に考えさせるだけの時間猶予と課題(材料)を与えるような授業構成にしたいと考えている。本題の英語であるが、本研修を受けて、学生のための教育活用というよりは、自分にとっての英語の必要性が高まったと感じた。あと何回かこのような経験を経て、自分自身、英語コミュニケーションへの自信を得て、学生へと還元していきたいと考えている。

平成 26 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	二村 彰
所属等	弓削商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>本研修「教員英語外地研修」は、商船学科の専門科目における英語の利用促進、英語による授業展開を目指した商船学科の専門教員の英語外地研修として、国立商船系高専の教員向けに特別にデザインされた英語研修プログラムである。私は、この研修を受講するに当たり、次の目的を持って研修に臨んだ。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 英語による授業能力の向上</li> <li>2. KCC と弓削における授業方法の比較</li> </ol>	
<b>2. 研修の概要</b>	
(1) 研修の日程	
9月11日(木)午後	リフエ着、オリエンテーション(Kyoko Ikedaコーディネータ)、歓迎ディナー
9月12日(金)午前	カウアイミュージアム見学、午後 Hashisaka夫妻の講演、Hanapepe町散策
9月13日(土)午前・午後	National Tropical Botanical Garden見学(Brian T. Yamamoto先生)
9月14日(日)	休日
9月15日(月)午前	校内見学、午後 英語研修(Jeff Mexia先生)
9月16日(火)午前	ハワイ歴史紹介およびKawaikini School見学(Dennis Chun先生)
	午後 英語研修(Brian Cronwall先生)、授業参観①(Oceanography:Stephen Taylor先生)
9月17日(水)午前	授業参観②(Science:Brian先生)、Grove Farm Sugar Plantation Museum見学
	午後 Tip Top CaféオーナーMr. Otaの講演、First Sugar Mill Monument見学、Mr. Gerald Hirata生家見学、Port Allen日系移民墓地見学(Mr. Gerald Hirata)
9月18日(木)午前	授業参観③(Hospitality Management:Dirk N. Soma先生)、授業参観④(Botany:Brian先生、Marahatta先生)
	午後 英語研修(Brian Cronwall先生)
9月19日(金)午前	スピーチ研修(Public Speaking:Greg Shepherd先生)
	午後 英語研修(Jeff Mexia先生)
9月20日(土)午前	双胴船ナマホエ見学(Dennis Chun先生)
	午後 自由行動
9月21日(日)	休日
9月22日(月)午前	スピーチ研修(Presentation:Dallas McCurley先生)
	午後 英語研修(Jeff Mexia先生)
9月23日(火)午前	個別プレゼンテーション準備(Kyoko Ikedaコーディネーター)
	午後 英語研修(Brian Cronwall)、英語授業実施(Oceanography: Stephen Taylor先生)
9月24日(水)午前	個別プレゼンテーション準備(Kyoko Ikedaコーディネーター)

午後 プレゼンテーション実施(多数KCC教員聴講)

9月25日(木)午前・午後 自由行動

夕刻 Final and Farewell Event (Brian先生、Cronwall先生、Jeff先生、Dennis先生、Ikedaコーディネータ)

## (2) 研修内容

研修内容を大別すると、①KCC授業体験、②英語プレゼンテーション研修、③カウアイ島の歴史、の3つに分けることができる。

### ① KCC授業体験

KCC授業体験では、各教員が希望するKCC授業を受講することができた。私は4クラスを受講することができた。

### ② 英語プレゼンテーション研修

英語プレゼンテーション研修では、発表内容の基本的様式、発表に対する精神的・肉体的な心構えとその練習方法を受講することができた。最後に、本番としてKCC講師陣の前で最終プレゼンテーションを実施することができた。

### ③ カウアイ島の歴史

カウアイ島の歴史については、カウアイ島博物館、サトウキビ産業と日系移民の足跡について関係者の声を聞きながら見学することができた。

## 3. 研修成果

私は、次の2つの目的（1 英語による授業能力の向上、2 KCC と弓削における授業方法の比較）を持って、本研修に臨んだ。ここでは、それらの目的の達成度について述べる。

### 1. 英語による授業能力の向上

結論として、この目的は達成された。理由として、KCC 授業 Oceanography (Taylor 先生) および最終プレゼンテーションの中で、私が 10 分間程度の英語授業を KCC 学生および KCC 講師に対して実施することができたためである。加えて、私の英語授業の終了後に、KCC 学生から質問があったことも、KCC 学生が私の授業を少なからず理解していると感じた。課題点として、私は学生の質問を半分程度しか理解できなかった。このことは、私のリスニングの力量不足を痛感し、同時に、私の語彙力と文法能力の向上の必要性を感じたことは、今後の課題となった。また、授業当日に Ikeda コーディネータより、私の英語授業の内容や言い回し等について多数のアドバイスを受けることができたことも、私の英語授業能力の向上につながったと実感している。

### 2. KCC と弓削における授業方法の比較

この目的の成果として、私の弓削における授業と KCC 授業の比較によって得られた成果を挙げるができる。私は弓削商船高専で気象学を教えているが、学生の理解が進まないことに大きな悩みがあった。当初の理由として授業時間数や学生人数の問題と考えていたが、これらは KCC 授業でも大きな違いはなく、むしろ、異なっていた点は、(1) 学生に考えさせる機会を多く与える授業方法、(2) 学生の想像を促進させる道具、に違いが見られたことが、今回の成果であった。

#### (1) 学生に考えさせる機会を多く与える授業方法

学生に積極的に発言させて、学生自身に考えさせる方法として以下のことが見られた。

- ・常に学生に「Why?」と問いかける。(Brian 先生)

・代表学生がホテルのプール管理の指導員となり他学生を指導する方法を考えさせる。(Soma 先生)

(2) 学生の想像を促進させる方法

・細胞や天体の図解を学生グループに板書させる。(Brian 先生、Taylor 先生)

・図、表が豊富な教科書を利用する。(Brian 先生、Taylor 先生)

・コンピュータによる天体や地球のシミュレーションを利用する。(Taylor 先生)

#### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

この研修成果は、1 英語による授業能力の向上、2 KCC と弓削における授業方法の比較、の 2 点である。

##### 1. 英語による授業能力の向上

今回、英語で授業を実施してみて、弓削の授業でも専門用語は英語で授業する必要があると感じた。したがって、今後は、専門用語は英語を使用していきたいと思う。また、研究発表では、英語で発表する機会を作っていきたいと思う。

##### 2. KCC と弓削における授業方法の比較

弓削における授業では、知識偏重な授業を実施していた。今後は、シミュレーションなどを使用した学生の理解を手助けする方法を積極的に取り入れ、且つ、学生が自ら考える機会を多く与えていきたいと思う。

## 海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏 名	秋葉 貞洋
所属等	弓削商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>商船学科の専門科目における英語の利用促進、英語による授業展開を目指した商船学科・専門教員の英語外地研修プログラムを通じて教員の英語能力および英語によるコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の向上をはかり、それらの成果を学生へフィードバックしていくことで高専商船学科に求められている学生の英語能力を含めた船員教育の質の向上を目指す。</p>	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>9月11日(木)～9月14日(日) (1週目)</p> <p>内容:カウアイ博物館見学、ハシサカ夫妻による日系人の歴史、生活についての講話、National Tropical Botanical Garden 見学。</p> <p>1週目では見学、講話を聞く、解説を受けることで英会話に慣れることを目的としていた。特に植物園見学ではカウアイコミュニティカレッジ(以降 KCC)のブライアン山本先生による植物園の解説が行われた。見学はただ、植物園の解説がなされるのではなく、先生から“なぜこのような形態がとられるか?”などの質問が行われ、それに我々が答えてくという見学形態が取られ、一方的な聞きとりにならないよう配慮が感じられた(図1)。また、ハシサカ夫妻の講話についても午後からの講話であったため、その前に会食をとる形態となっていた。これも同様の配慮が働いていたと思われる。</p> <p>9月15日(月)～9月21日(日) (2週目)</p> <p>内容:英語授業(A, B)、授業参観、ハワイ史概論、カワイキニ学校見学、パブリックスピーキングについての講義、グローブファームシュガープランテーション博物館見学、砂糖プランテーション発祥地史</p>	
<p>図1 Botanical Garden 見学</p>	

跡見学、コロアシュガーミル跡地見学、プランテーションキャンプ跡地見学、アレン港付近及びワイメア地区見学、ナマホエ(カヌー)建造現場見学。

英語授業はKCCのジェフ先生とブライアン先生によって行われた。授業は最初自己紹介から始まり、先週体験したこと、授業参観を受けKCCと日本で同じ所、異なる所は?という質問に即興で回答を求められるようなコミュニケーション能力を求めるものへ移り、3週目のプレゼンテーションについてどう進めるか?という内容へ移行した。この授業は講義が中心ではなく、対話(コミュニケーション)をメインに置いたものであった。

授業参観は、事前にKCCで行われている授業の中から希望したものを各教員個別で参観しに行く個別プログラムとなった。実際に行われている授業を参観し、日本の講義型授業とは異なる様々な形態の授業に接することで今後の講義の在り方について大変参考となるものであった。私はハワイ学、自動車関連授業、エネルギーを選択した。またエネルギー担当エリクソン先生より、先生が手掛けているバイオマス(バイオディーゼル燃料(BDF))製造装置を見学させていただいた(図2)。

見学は1週目と同じように行われた。ヒラタ氏にはプランテーションで働いた日系人の生活等について現地で解説していただき、質疑応答が行われた(図3)。



図2 BDF 製造装置と  
エリクソン先生



図3 解説中のヒラタ氏

9月22日(月)～9月27日(土) (第3週目)

内容：英語授業(A,B)、プレゼンテーションスキルについて、プレゼン準備、最終プレゼンテーション。

3週目はプレゼンテーションのまとめが中心となった。発表内題目は「Is Bio-Mass Effective Solution?」とし、日米のBio-Mass燃料に関するバックグラウンドの違いなどについてまとめた。まとめるにあたり英語授業等でアドバイスをうけながらパワーポイントを完成させた。また、プレゼンテーションスキルの授業では欧米方式のプレゼンテーションスキルについての指導を受け、最終プレゼンテーションに臨んだ(図4)。

今まで何度か国際シンポジウム等のため何度か英文パワーポイントを作成したが、欧米人に対しては日本語で作成したパワーポイントを英訳するだけでは効果的でないことを指摘され、大変参考になった。



図4 最終プレゼン風景

### 3. 研修成果

#### ・プレゼンテーション能力の向上

これまでの経験からパワーポイントを作成するにあたり重要なポイントを簡潔に記述、または強調することで聴衆に要点を伝えることを心がけてきた。しかし、日本語話者と英語話者の感覚の違いがプレゼンを行うに当たり重要になることが今回の研修で得られた最大の成果である。特に指摘を受けた箇所は英語話者が動詞を重要視しており“is”を多用せず力のある他の動詞に置き換えるということであった。論文を読むときもまず主語、動詞、目的語を探して文意をつかむので、はっきり“～が(は)～した。”の方がわかりやすい。これはあたりまえすぎて誰も指摘しない点なのであろうが、特に私のように英語が苦手な者にとってコミュニケーションを取るうえで最も重要な情報であると考えられる。また、研修プログラム中のパブリックスピーキングやプレゼンテーションスキルの講義中に指摘された話し方や間の取り方、アイコンタクトの取り方の重要性である。我々も講義等を通じてそれらを駆使しているが、研修を通じてそれらの重要性について再認識した。

#### ・英会話能力の向上

研修を通じ何度も自己紹介をし、話を傾聴し、つたないながら会話を繰り返した結果、英会話能力が向上したと思われる。特に研修初期はかなりの確率で話を聞き取れないことが多かった。また、話したい単語が思い出せないことも多かった。しかし繰り返し聴き、話す機会が増えることで研修終了時にはほんの少しであるが改善されたように感じられた。これは英語授業にあった出題に即興で答える課題や見学等で会話せざる得ない状況を作っていた研修プログラムの効果であると考えられる。

#### ・日本と異なる授業形態を体験したこと。

授業参観または英語授業を通じて感じたのは、KCCでの授業は日本の講義(1方向)型とは異なり対話(双方向)型であることが大きな違いであった。講義型は短時間で大量の知識を伝えるには合理的であると考えられるが、KCCの様な活発な質疑応答を講義の中に取り入れることができれば学生の理解度のさらなる向上を図れる可能性があると思われる。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

私が担当している科目は本科で内燃機関学、専攻科で熱機関工学である。これらの講義をいきなり英語ですることは私の英語レベルおよび学生のレベル、カリキュラム内容に余裕がないことから、かなり難易度が高いと考えられる。今回の研修の経験を踏まえ、英語力アップに重要なのは英語に普段から接することであると考えている。研修概要、成果には書いていないが自動車関連の授業参観において、自分の専門分野にかなり近いため、なじみのある聞き取れる単語等が多く他の授業に比べればまだ内容が理解できた。まず、手始めとして本科の卒業研究と専攻科の特別研究の文献調査において学生の負担増にならない範囲で英語資料の読み合わせを行い、技術英語に接する機会を増やすことから手を付けていきたいと考えている。また、授業においても参考資料等を英文のものを探し、授業にとり入れることも検討したいと考えている。ただし、学生の人数の多い授業では、いままで通りの1方向の講義方式では学生はそのまま流してしまうと思われる。そのためKCCで行われていたような双方向の授業を行うなど、授業方法、教材、内容等の精査を行う必要があると思われる。

## 5-3 平成 27 年度教員英語外地研修報告集

## 平成 27 年度 英語外地研修参加者

高専名	職 名	氏 名
富山高専	教授	保前 友高
鳥羽商船	教授	窪田 祥朗
広島商船	教授	大山 博史
大島商船	助教	本木 久也
弓削商船	教授	湯田 紀男

平成 27 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	保前 友高
所属等	富山高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>「教員英語外地研修」は、ハワイ大学カウアイコミュニティカレッジ（KCC）で行われた。本研修は、商船学科の専門科目における英語の利用促進、英語による授業展開を目的とし、商船系高専の教員の能力向上のために準備されたプログラムであった。本研修への参加を通じ、実践的な英語プレゼンテーション能力の向上を目指した。</p>	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>本研修は、英語によるプレゼンテーション能力の向上に主眼が置かれていた。研修は、プレゼンテーションに関する授業、プレゼンテーション（自己紹介、最終プレゼンテーションの2回）、KCCの学生向けに行われている授業の参観、ハワイの歴史、文化等に関する授業、校外研修に大別できた。</p> <p>プレゼンテーションに関しては、「多数の人の前で行う英語プレゼンテーションをいかに行うべきか」という点について、KCCの5名の教員により授業が行われ、時間的に本研修の大部分を占めた。米国では、上記の内容を学ぶために”Public Speaking”という授業があるそうで、本研修の授業もこの内容に準じて行われた。プレゼンテーションの構成、発表中の声や動作、パワーポイントの作成などについて、指導を受けた。</p> <p>プレゼンテーションを実際に行う機会が2回用意されていた。研修期間の序盤に、自己紹介のプレゼンテーションを行った。昼休みの時間を利用して主にKCCの教職員向けに行われ、約30名の聴衆が集まった。1名5分の持ち時間で、参加した5名の教員が順次自己紹介を行い、その後、KCCの教職員を交えて懇談する形式で行われた。最終プレゼンテーションは、1名15分の持ち時間で、参加した5名の教員が順次発表する形式で行われた。内容は、各自が研修期間を通じて準備したものであり、リハーサル等を通じてKCCの教員の指導を受けた。こちらも昼休みの時間を利用して主にKCCの教員向けに行われ、約20名の聴衆が集まった。</p> <p>授業の参観は、用意された時間に数学、天文学の授業を各1回参観するとともに、毎朝、デニス・チャン教員のハワイ学に関する授業を連続して合計9回参観した。</p> <p>ハワイの歴史、文化等に関する授業では、日系移民の歴史についての授業、ハワイの主食であるタロイモを栽培する畑での実習が行われた。</p> <p>校外研修は、日系移民の歴史を学ぶ上で重要な場所の見学、国立熱帯植物園の見学、カウアイ島で建造中のポリネシアの伝統的な航海カヌー「ナマホエ」の見学が行われた。</p>	

### 3. 研修成果

プレゼンテーションに関する授業を受け、米国のプレゼンテーションの流儀を知ることができた。まず、構成を重視していることがわかった。プレゼンテーションでは、自己紹介、トピックの紹介、なぜこのトピックを選んだのか、本題（ポイントを3-5点程度）、まとめ、という構成を守るように複数の教員から指導があった。また、話す際には、スピード（120-150語/分）、声の大きさ、流暢さ、聴衆を引き込む技術が必要であるとの説明があり、それぞれ、具体的な方法についての説明があった。例えば、聴衆を引き込むには、アイコンタクトや適切な身振り、ユーモア、質問などの方法があるとの指摘があった。また、はじめの言葉と結論の最後の言葉が重要であるとの指摘もあった。

実際に2回のプレゼンテーションを行い、英語で話しきるという経験をする事ができた。特に最終プレゼンテーションでは、授業で習ったことを参考にし、リハーサル等で指導を受け、構成、身振り、視線などにも気を配りながらプレゼンテーションを行うことができた。なお、タイトルは、” Two Programs for “KOSEN” Students in KCC”（KCCで行う高専学生向けの2つのプログラム）とし、KCCで行っている商船学科向け国際インターンシッププログラムなどの説明を行った。KCCの教職員と言えども、必ずしも多くの方が同プログラムについてご存知であるとは言えない状況であったので、ご理解いただく上で、よい機会となった。

授業の参観では、富山高専の授業に比べて比較的少人数（10-20名）で授業が行われていることが印象に残った。また、学生が発言する機会が多く、教員と対話しながら進められていた。数学では小テストが行われており、富山高専と似た様子であった。ただ、取り扱っている内容のレベルに関しては、高専と比較して高いとは言えず、米国の教育システムの問題を垣間見たように思われた。

ハワイの歴史、文化に関する授業、校外研修では、カウアイ島のかつての産業としてのサトウキビ栽培の重要性、そこに関わった日系人の苦勞と成功について知ることができた。特に、現存するプランテーションハウス（プランテーション労働者のいわゆる社宅）の見学が印象に残った。熱帯植物園、伝統的航海カヌーの見学を含め、カウアイ島の景色や気候を表面的に楽しむだけではなく、背景を深く知ることができた。

### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

私は、今年度から専攻科の授業「衝撃工学」において、英語の教科書を取り入れたが、授業は日本語のみで行っていた。

本研修を通じて、英語によるプレゼンテーションの基礎的な構成や留意点のある程度習得することができたため、今後、この知見を活かし、英語による授業展開につなげていきたい。

平成 27 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	窪田 祥朗
所属等	鳥羽商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>「KCC 教員英語外地研修」は、商船学科の専門科目における英語の利用促進、英語による授業展開を目指した商船学科・専門教員の英語外地研修として、国立商船系高専の教員向けに特別にデザインされた英語研修プログラムである。研修は、8月29日～9月17日まで、ハワイ州立大学カウアイコミュニティカレッジ（KCC）で行われた。本研修を通じて、専門科目における英語の利用と英語による授業展開という目的に応える、実践的な英語コミュニケーション能力の向上を目指す。</p> <p>この研修では、英語の語学研修だけでなく、プレゼン方法、技術の習得、ハワイ文化への理解を深めることを目的とする。最終的に、各自でテーマを選定し、研究発表会で成果を発表する。</p> <p>この研修に参加することにより、自身の英語力の向上とともに、英語の必要性、英語による授業など、学生へ還元することを目的とする。</p>	
<b>2. 研修の概要</b>	
8月29日(土) カウアイ到着。コーディネーターの池田さんが出迎え。ホテル到着後、協約書にサインしてチェックイン。夜は、池田さん、Dennis 先生による Welcome Dinner。	
8月30日(日) 休日。	
8月31日(月) 授業初日。 池田さんのチェックインから始まる。ここから、すべてが英語になる。その後、キャンパス案内があり、昼食。 午後からは、Jeff 先生の English (A)。自己紹介の仕方を学ぶ。全員が前に出て、紹介と質疑応答。次の日のネットワークミーティングに向けて、自己紹介のスライドを作成。	
9月1日(火) 午前中は、日系移民の歴史の話。Hirata 先生。 資料がたくさん展示されていた。すべてプライベートで収集したとのこと。 昼食は、Networking Meeting のため、ピザや巻き寿司が用意され、多くの人が聴きにきた。3分間の自己紹介を行う。その後、フリーディスカッションになる。 午後は、Brian C. 先生の English (B)。簡単な自己紹介をし、ブライアン先生に質問する形式。最後に、何を最終プレゼンテーションのテーマにするか聞かれる。次回、どのテーマにしたか発表する。	

9月2日(水)

Field Study

午前は、プランテーションの歴史ツアー。Hirata 先生。

昼食は、Tip Top レストラン。日系人がオーナーの店。

午後は、Hirata 先生の生家がプランテーション会社の社宅だったので見学。次に、ハナペペを見学し、最後は、カウアイコーヒーカンパニーでコーヒーを試飲。

9月3日(木)

午前中は、授業参観。Georgeanne 先生の Electronics を見学。授業は、講義と実験を並行して行う。学生数は10~15名程度。講義は先生が行い、並行する実験は、学生自身がテキストを見ながら各自で行う。実験では、計測器を用いて抵抗を測ったり、カラーコードを読ませたりしていた。各自のペースで進められるようになっている。

午後は、Brian C. 先生の English (B)。まず、夏期休暇に日本で何をしたか聞かれる。その後、プレゼンテーションのテーマを発表。

9月4日(金)

午前中は、8:00 から Dennis 先生のハワイの歴史の授業を任意で見学。その後、正規の Dennis 先生の授業。45分間、ハワイのカヌーに関するビデオを見て、その後、ビデオ内容に関する質問に答える。

午後は、Jeff 先生の English (A)。今までの習ったことやカウアイで経験したことを答える。その後、プレゼンテーションの流れを講義。

9月5日(土)

Field Study

ボタニカルガーデンの見学。次に、カウアイコーヒーカンパニーで農園見学。最後に、潮吹き岩を見学。

9月6日(日)

休日。

9月7日(月)

勤労感謝の日で祝日。

9月8日(火)

午前のはじめは、Joyce 先生の Coffee talk。アメリカでの社会問題について講義、

午後の後半は、Collene Kaiminauao 先生による Public Speaking Workshop。プレゼン技術について学ぶ。

午後は、Brian C. 先生の English (B)。休日に何をしたか一人一人答える。その後、プレゼンテーションの内容を発表。

9月9日(水)

8:00 から Mark Oyama 先生の Culinary Arts の授業を任意で見学させてもらう。Continental Cuisine、Asian Pacific Cuisine の調理実習。

午前の正規授業は、Georgeanne 先生の Coffee talk。いままでの研究成果について説明を受ける。特に、NASA との共同研究について説明があった。

午後は、最終プレゼンを作成。

9月10日(木)

午前の前半は、池田さんによる Pronunciation Clinic。日本人が分かりにくい発音やリズム、イントネーションなどを講義。

午後の後半は、Collene Kaiminao 先生による Public Speaking Workshop。学生のプレゼンからプロによるプレゼンの例をビデオ鑑賞し、真似すべき良い点や改善点についてディスカッション。

午後は、Brian C. 先生の English (B)。2名が最終プレゼンテーションのリハーサルを行い、その講評を先生から聞いた。

9月11日(金)

午前の前半は、タロイモ畑の作業体験。草引きを行う。

午後の後半は、Greg 先生の Public Speaking Workshop。演劇の先生らしく、発表前の深呼吸や発声練習などを講義。各自に、テーマがその場で与えられ、即興でスピーチをする。

午後は、Jeff 先生の English (A)。Brian C. 先生も来てくれる。3名の最終プレゼンテーションのリハーサルを行い、両先生から講評を受けた。

9月12日(土)

Voyaging Canoe Namahoe の建設作業を手伝う。

9月13日(日)

休日

9月14日(月)

午前は、最終プレゼンテーションのリハーサル。

昼休みに、最終プレゼンテーション。

午後、KCC を自由見学。

9月15日(火)

帰国準備。

夕刻、Farewell Dinner。

9月16日(水)

早朝、カウアイ出発。

9月17日(木)

夜、東京着。

### 3. 研修成果

第一に、英語に慣れ親しむことができたことが、大きな成果と考える。英語を話すには、文法など間違えていないか、間違った英語を話していないかを心配し、いままでは話すことに躊躇することが多かった。研修を受け、間違いを気にして何も話さないよりも、間違っただけでも話をしようとする姿勢が重要ということを理解した。自分の思いを、相手にいかにして伝えるかを考え、時には単語だけでも良いから意思を伝える必要があると感じた。これは、英語のできない私の話を、KCC スタッフが親身に一生懸命に聞いてくださったからこそ、私自身が理解でき、成長できたと考えている。

次に、生活環境が全て英語だったため、英語で相手に用件を伝えなければならず、常に勉強する環境が整っていたと感じる。このような経験は今までになく、必要に迫られると必然的に勉強するものだと、

身をもって感じる事ができた。この体験は非常に貴重であり、学生にも当てはまることと考える。できる限り、この経験を学生に伝えていきたいと考えている。

最後に、ハワイ文化について授業や校外学習を通して理解した。特に、日系移民の影響が色濃く出ていると感じた。そのためか、ハワイには、非常に親近感を持つことができた。

#### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

まず、英語による授業に至らないにしても、専門用語の英語による表記などから、徐々に英語に慣れていく授業を展開したいと考える。

また、英語によるプレゼン方法、プレゼン技術について学んだので、国際会議などで研究発表する際に活かしたいと考える。特に、相手をいかに引きつけ、興味を持ってもらえるかを念頭に、一人でも多くの聴衆に研究内容を伝えられよう発表していきたい。

さらに、プレゼン技術は、日本語によるプレゼンや授業方法に活かせると思っている。この技術は、学生にも教授できればと考えている。ただし、アメリカの手法をそのまま利用すると、日本ではかなり違和感があるので、日本流にアレンジし、良い面を引き出せるよう教えていきたいと考える。

平成 27 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏 名	大山 博史
所属等	広島商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>参加教員の英語力向上、授業への英語利用促進、英語による授業展開を実施し、商船学科学生の英語力を向上させることを目標としている。プレゼンテーション能力向上のための授業を受け、得た知識を参加教員が活用することはもとより、他の教員に知識、経験を伝える事により、学科全体の英語教育能力の向上を目的としている。また、研修を通じて、ハワイの文化への理解、日本からの移民の歴史を理解し、今後の国際交流の在り方を考えられる人材となることも目的としている。</p>	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>8月31日(月) 午前 チェックインプログラム Kyoko Ikeda 先生から今後の予定について説明をうけた。また円形に座り、床に置いた石を拾った人から順番に現在のエネルギーレベルやその理由など英語に慣れるためのスピーチを簡単に順番に実施した。その後学内見学を行ったが雨のため、あまり細かくは行えなかった。午後は JEFF Mexia 先生による English A の授業 自己紹介方法を習い順番に自己紹介を行った。</p> <p>9月1日(火)</p> <p>午前 Gerald Hirata 先生による日本移民の話が行われた。貧しいサトウキビ畑で働いていたこと、盆踊りの話、二次大戦中の迫害、アメリカ軍での日系人の活躍、日系人が議員になるまでの話と、ビデオでの説明であった。日系人が日本文化を守っていることが大変印象的であった。また、ハワイでは日本民謡や太鼓のテンポが速くなっていることも印象的であった。現在では、サトウキビ工場は1つしかハワイに残っていないそうである。カウワイ島でもお盆フェスティバルが行われているそうである。また、ハワイと米国本土の日系人では文化や考え方の違いがあり衝突もあったそうである。</p> <p>昼休みには Networking Meeting が行われ、参加教員が自己紹介を兼ねたプレゼンテーションを5分程度実施した。午後 Brian Cronwell 先生による英語の授業Bであった。</p> <p>簡単な自己紹介に始まり、先生の質問に答えた後、こちらから先生に質問を行い、そのフォロー質問などを実施した。その後発表の形式として Comparison/contrast clear and focused subjects evaluation or judgement などの説明があり、比較の方法として必ず Quality をそろえる(同じテーマで比較すること)話があった。</p> <p>9月2日(水)</p> <p>午前中 GroveFarm an Historical sitr of plantation Life on Kauai に行った。入植してきたアメリカ人が、水の少ない地域で灌漑用水をひき貯水池を作りサトウキビ畑を築いた話をきいた。とりわけ川も周りになかった地域で平地に水を引き、雨の時期に水をため降らない時期に水を流すことが重要であった。またモリワキさんという日系人のサトウキビ畑労働所の生活を見た。御主人の死後奥さんは家政婦のような仕事で雇われ、子供の学費を出してもらった話を聞いた。また、サトウキビ畑労働所の創業</p>	

者が病院などの設立のための寄付をした話を聞いた。午後は、サトウキビ工場跡地、日系移民の建立した寺院、日系人墓地、発電所等を視察した。

9月3日(木) 授業参観

Electronics      Georgeanne Purvinis      9:25 - 10:40      DKITEC 101

Astronomy      Michael Hannawald      10:50- 12:05      NSCI 101

を参観した。エレクトロニクスは、内容的にはオームの法則など本科の2年程度の内容であった。教え方も日本とさして変わらない講義形式であり、テキストは分厚いものであった。黒板は全く使わずPC画面の投影が主であった。驚いたのは、20分程度でengineeringの学生とElectro technicianの学生に分かれ前者は授業を続け、後者は実験を始めた。抵抗を三つつないで電圧を計る簡単なものであるが、誰もいなくても自主的に実験を続け、テキストに答えを書き込んでいた。一人でどんどんやる学生、遅い学生、人に教えてもらう学生などの様子は日本の学生に似ていた。次にAstronomyを見学した。天球の話からはじまり、見た目の角度と距離から星の大きさを計算する問題が何問か出され、学生が解いていた。日本の授業とあまり変わらない姿であった。PC画面の投影、PCのパッドに書き込みが主であったが、定数などは黒板に書いていた。午後はBrian Cronwall先生の英語であった。昨日の視察の感想に始まり、最終日の発表の内容について話し合った。

9月4日(金)

8時~8時50分 DENIS CHUN 先生のHAWAI学の講義を聞いた。(臨時で追加)

9時30分~昼 DENIS Chun 先生のホクレア号のビデオを見たあと、質疑応答を行った。午後はJEFF MEXIA先生の英語授業であった。ここでは、これまでの過ごし方を英語でスピーチした後プレゼンテーションの内容について話し合った。Introduction yourself, Introduction your topic, Why did you chose your topic? Share main ideas or points with audience. Leave some time for questions.

等の項目を入れるように言われた。

9月5日(土)

一日Braian Yamamoto先生と植物園に行った。ユーカリの殺菌作用やオジギソウのような(sensitive plant)塩分濃度の差を使ったポンピングによる仕組み、ほかの木の枝にぶら下がるためのhookなどについて聞いた。植物の能力の高さと、それを人工的な機械に応用できることを学んだ。

9月8日(火)

9時から10時 coffee talk with Joyce Nakahara先生に参加した。黒人差別についての話が主であった。

10時30分からCollen Kaiminaauao先生からスピーチの仕方を習った。途中Michel Hannawald先生のAstronomyの授業に最終プレゼンテーションに使うためのアンケートを取りに行った。

午後からは、Brian先生の英語授業で昨日の過ごし方、プレゼンの進捗状況、プレゼンの作り方などを習った。

9月9日(水)

Georgean 先生の話9~10時 彼女の教育について特にNASAのロケットにのせたUV測定器の話は面白かった。次の打ち上げには浜松ホトニクス社製のマイクロPMTを使った中性子測定器を載せる予定であると伺った。その後Michel Hannawald先生の化学の時間にアンケートを取りに行った。

その後再びGeorgean先生に授業方法やカリキュラムについてのインタビューを行った。昼は鹿児島高専

の学生のプレゼンテーションを見た。午後はプレゼンテーションファイルを作成する時間にあてた。

9月10日（木）

午前 Kyoko Ikeda 先生と話し合いをした。

Collen Kaiminaauao にプレゼンテーションの下手な例2例とうまい例（TED）2例を見せてもらい、プレゼンの仕方を学んだ。

午後は作成した最終発表を Brian Cronwall 先生に見てもらい修正を施した。

9月11日（金）

午前 タロイモ畑で作業を実施。ハワイの仕事の大変さのほんの一端ではあるが感じる事ができた。

10時から Gregory Shepherd 先生にプレゼンテーションの方法を習った。演劇の先生で呼吸の仕方や話し方など、大変参考となった。

午後は JEFF 先生にプレゼンを見てもらった。

9月12日（土）

雨のためナマホエ号見学は中止。視察、発表練習を個人的に実施した。

9月13日（日）

ナマホエ号見学を行い、制作を手伝った。

9月14日（月）

最終発表を実施し、無事終了した。DVDに録画していただいた。

9月15日（火）

8時から DENIS 先生のハワイ学の授業を見学。ハワイの神話についてであった。9時20分から大島商船の学生の発表を見学。夕刻よりお別れ会。

### 3. 研修成果

到着した日から英語漬けの毎日であり成果は大きいように思う。英会話に関しては、学生向けの授業とは違い、通訳なしですべての授業が行われた。また自らの英会話力向上のため、店員やホテルのロビーでは必ず話すように心がけ、町で出会った人やバスで隣に座った人等とも会話をしよう心掛けた。その成果もあり、聞き取り能力、会話能力を向上させることができた。昼休みには KCC の教授と話すことを心掛けるとともに、授業終了後には学校の仕組みや単位の出し方等についてのインタビューを行った。また、学生から直接意見を聞くためにアンケートを作成し、2クラスでアンケートを実施した。アンケートの結果は最終発表の内容として使用した。ホテルにいる時間は持参した TOEIC の参考書を習った内容を取り入れながら発音し、最終発表のための発音練習を行った。授業の多くがプレゼンテーション技術に関するものであり、そこから得たものを最終発表に数多く用いることができた。ハワイ文化、日系移民についても多くを学び、日系人の先生からは、日系人の労働の厳しさを描いた歌やハワイ語の歌を教えていただき、一緒にウクレレを弾きながら歌う機会も持つことができた。

最終発表は、授業で得た知識を全て取り入れることができ、今まで自分がやってきたものとは全く違うスタイルの発表をすることができた。発表後ビデオ録画した自分の発表を見たが、発音、滑舌の悪さや同じ単語ばかりを使っている点、落ち着きのなさなど修正すべき点が多々あったが、今後の教育に生かすという意味でも大変有意義であった。

#### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

現在海事英語及び TOEIC リスニングの授業を担当しており、今回の研修で得た成果は、学生の会話力、リスニング力の向上は直接役立てることができる。生の英語を短い期間ではあったが活用したことは、今後の授業展開に説得力を持たすことができるとともに、授業への自信にもつながると思う。また他の教員にも自分の経験を伝え、学科全体の語学能力が向上することにつなげたい。

プレゼンテーションに関しては、枠組みや構成などをまず学んだ。これは直接自らの発表に活かせるとともに、プレゼンテーション方法を教える授業は日本ではあまり行われていないが、今後学生指導に活かせるものである。また日本とハワイとは発表に対する考え方が少し異なっているが、呼吸法、身のこなし、声の出し方等学んだことは数多く、学生指導に可能な限り取り入れていきたい。

ハワイ文化、日系移民の歴史、黒人差別についての内容は学生指導のバックグラウンドとして取り入れていきたい。

平成 27 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	本木 久也
所属等	大島商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>私が計画した教員英語外地研修の目的は、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 商船学科の授業につき英語の利用の促進をするために英会話能力を向上させる。</li> <li>2. 校内練習船実習を行う際に英語を取り入れ、作業指示や船内コミュニケーションを英語で行うために、教員の英会話能力を向上させる。</li> <li>3. 英語圏の実習生が本校練習船に研修で乗船する際に、研修成果向上のために教員の英会話能力を向上させる。</li> <li>4. KCC の教員と更なる情報交換を行うきっかけとする。</li> </ol>	
<b>2. 研修の概要</b>	
(1) 研修日程	
<p>8月28日(金) 午前:成田へ移動 岩国空港～羽田空港 航空機利用、午後:1700 より成田菊水ホテルにて事前打ち合わせ。</p> <p>8月29日(土) 午前:空港で待機、午後:2105 時発ホノルル行き搭乗、1300 時(ハワイ時)リフエ空港到着、宿泊場所へ移動し宿泊場所で KCC 担当者と受講に関する契約を行った。</p> <p>8月30日(日) 午前、午後:食料品店の場所確認、食品、生活用品の購入</p> <p>8月31日(月) 午前:Check in program(池田さん)、午後:English class( J. Mexia 先生)英語のプレゼンテーションの構成</p> <p>9月1日(火) 午前:Great grandfather' s drum(Hirata 先生)日系 3 世の Hirata 先生が農耕道具、古書を持参し授業を行った。福島からの移民の方が太鼓や盆踊りで交流されているのが印象的であった。午後:Network Meeting 自己紹介を兼ねてショートプレゼンテーションを行った。</p> <p>9月2日(水) 午前、午後:Hirata 先生のガイドの下、Field Study “Grove Farm Plantation Museum” の見学、砂糖工場跡地の見学、砂糖工場の労働者宅跡の見学、日本人墓地へのお参り、旧 Japanese Town の見学。</p> <p>9月3日(木) 午前:Class observation 各授業を回り受講オブザーバーとして受講した。本木は Astronomy を受講、午後:English Class(B)( B. Cronwall 先生)様々な質問を行う質疑応答の授業を受けた。待ち時間が長いように感じられた。最後は、プレゼンテーション関係授業。</p> <p>9月4日(金) 午前:Intro History of Hawaii(D. Chun 先生)2007 年のホクレア号の公開を題材とした授業、午後:English Class(A)プレゼンテーション関連</p> <p>9月5日(土) 午前、午後:National Tropical Botanical Garden 見学(B. Yamamoto 先生 日系 3 世) ハワイの植物の紹介、植物の習性を触って、「何故こんな形をしているのか考えて」が繰り返され、興味引くのが上手く、実習で船を説明する際の学生の興味を引く手法に活用できる授業方法であった。</p>	

9月6日(日) 島内西、北西岸の観光、ワイメア市街、ワイメア溪谷へ観光

9月7日(月) 労働感謝の日につき休日、島内北岸の観光

9月8日(火) 午前:Speaking Work Shop(Colleen Kaiminaauao 先生) プレゼンテーションのリズム、間の取り方についての講義、午後: English Class(B) ( B. Cronwall 先生)、休日に何を行ったか質疑応答を行った。

9月9日(水) 午前、午後:Directed Research/Class Observation Interview 教室でプレゼンテーションの準備を行った。本日は午後から Kauai Museum を訪問しプレゼンテーションのための移民に関する資料収集を行った。

9月10日(木) 午前:Coffee Talk(Joice Nakahara 先生)米国の社会についての講話、Speaking Work Shop(Colleen Kaiminaauao 先生)プレゼンテーションのリズム、間の取り方についての講義、午後:プレゼンテーションの準備

9月11日(金) 午前:Hawaiian Tradition Taro(D. Chun 先生)にてタロイモ畑の除草作業を行いハワイの伝統文化、午後:English Class(A) ( J. Mexia 先生)& ( B. Cronwal 先生 1) プレゼンテーションの予行(Dry Run)を行った。

9月12日(土) 午前:雨天のため Namahoe オーシャンカヌーの作業は中止

9月13日(日) 午前:Namahoe オーシャンカヌーの建造の加勢を行いハワイ原住民とポリネシアの繋がりについて講話(D. Chun 先生)があった。午後:プレゼンテーションの準備

9月14日(月) 午前:プレゼンテーション会場の設定と Dry Run を行った。午後:プレゼンテーションを行い、研修を完了した。本日は周防大島からハワイへの移民が何故多いのかを題目とした。

9月15日(火) 午前:D. Chun 先生のハワイ学の授業を見学、大島商船高専の学生のプレゼンテーションを見学し学生の情報交換へ参加した。午後:帰国準備、夕刻:KCC から送別会の招待を受け、受講修了証書の授与があった。

9月16日(水) 午前:Life 空港発、成田行き帰路に着いた。成田空港より羽田空港へ陸路移動。羽田空港発、岩国空港着。帰宅

## (2) 研修内容

- ① 英語コミュニケーションの実践的な習得。
- ② 英語を利用したプレゼンテーションの方法。
- ③ カウアイ島の歴史、ポリネシアよりハワイ原住民が移住した歴史、日系人移民の製糖工場での歴史と先の大戦中の生活状況。
- ④ タロイモを中心とした食文化の紹介。

## 3. 研修成果

この度の英語研修は上記1項の目的をもち参加したが、どちらかと言うと話を聞くという授業が多く、自分で会話を求められる機会が少ない状況であったのは心残りであった。

英語圏の中での研修であったので、自分が平素から行っている英語の学習がどれだけ効果があるのか試す事ができ、現在の状況では英語授業を行うにはまだまだ力量不足だということを肌身を通じて、実感することができた。

KCCの教員が英語で行う授業を受け又は、見学し授業の組み立て興味の引き方等を見る事ができた。

#### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

1. 現在担当している海事英語について授業の進め方について今回体験できた授業方法を実践していきたい。
2. 今回の英語圏での研修成果を校内練習船での実習時に英語を使用した作業指示、並びに、英語を利用した船内コミュニケーションに発揮させたい。

平成 27 年度大学間連携共同教育推進事業

海事人材育成プロジェクト「KCC 教員英語外地研修報告書」

氏名	湯田 紀男
所属等	弓削商船高等専門学校 商船学科
<b>1. 研修の目的</b>	
<p>私の研修の目的は、ヒアリングの向上、英語で話す時の表現力の向上である。相手の話が聞き取れなければ会話は成立せず、また、表現力無しには上手く伝わらないからである。この二つの目的を持ってこの研修に参加した。加えて、これらの向上が今後、語学力が必要とされる商船学科の学生教育に活かされるものとする。</p>	
<b>2. 研修の概要</b>	
<p>研修日程</p> <p>8月28日（金）事前打ち合わせ（成田菊水ホテル会議室）</p> <p>8月29日（土）午後 リフエ到着、プランテーション・ハルにチェックイン、ウエルカムパーティー</p> <p>8月30日（日）休日</p> <p>8月31日（月）午前 オリエンテーション（KCC）Ikeda先生 午後 English（A）Jeff先生</p> <p>9月1日（火）午前 Film and Discussion Hirata先生 昼 Networking Meeting 午後 English（B）Brian先生</p> <p>9月2日（水）午前 Guided Tour of Grove Farm Plantation Museum Hirata 先生 午後 Heritage Tour of Plantation History Hirata 先生</p> <p>9月3日（木）午前 Class Observation（Math 103, 二次関数） 午後 English（B）Brian先生</p> <p>9月4日（金）午前 Film; Hokule`a Passing the Torch, Introduction to History Hawaii Dennis先生 午後 English（A）Jeff`先生</p> <p>9月5日（土）午前 Guided Tour of National Tropical Garden Yamamoto先生 午後 Guided Tour of Kauai Coffee Yamamoto 先生</p> <p>9月6日（日）休日</p> <p>9月7日（月）休日</p> <p>9月8日（火）午前 Coffee talk, Public Speaking Workshop Colleen先生 午後 English（B）Brian先生</p> <p>9月9日（水）午前 Coffee Talk Georgeanne 先生</p> <p>9月10日（木）午前 Pronunciation Clinic Ikeda先生、Public Speaking Workshop Colleen先生 午後 English（B）Brian先生</p> <p>9月11日（金）午前 Hawaiian Tradition Dennis先生、Public Speaking Workshop Greg先生 午後 English（A）Jeff先生</p>	

9月12日（土）休日  
9月13日（日）Visit Voyaging Canoe Namahoe  
9月14日（月）午前 Presentation Rehearsal  
午後 Final Presentation  
9月15日（火）夕方 Farewell Dinner  
9月16日（水）Check out Plantation Hale, Depart Lihue for Honolulu  
9月17日（木）成田着17時頃  
9月18日（金）帰宅（広島）

### 3. 研修成果

ヒアリング向上については、熱心な授業や日常生活において、リアルな英会話に触れ以前より会話の内容が聞き取れるようになった。日本においては、発音やアクセントや抑揚がなかなか身に付かない。しかし、英語だけの環境に加え、授業で真剣かつ集中して聞き取ろうとする事で、ヒアリング力が向上したと考える。

会話における表現力については、アイコンタクト及びジェスチャー（ボディーランゲイジ）を会話に取り入れ、理解しやすい表現力を身に着けるよう指導があり、多少なりとも身に付いたと考える。

Coffee Talk において、授業から離れて、アメリカの人種問題等について会話がなされた。日本にはあまり馴染みのない内容ではあったが、人種問題の深い問題点等、歴史も含めて理解する事ができた。

ハワイの移民の歴史についての授業では、日系の移民の苦勞と活躍に触れる事ができ、現在に至るハワイの歴史を学ぶ事ができた。また、文字や講義のみではなく、現場をバスで巡る事ができ、より深く学ぶ事ができた。

授業見学については、数学の基礎（二次関数）を見学した。講義の下準備（テキスト）が分かりやすく、時間配分（講義、質疑、小テスト、解説、宿題）が良くできていて感心した。これについては、今後、自己の講義の参考としたい。意義のある授業見学となった。

今回の講義の中心的な内容は、プレゼンテーションに関するものであった。構成、スピード、音量、抑揚、アイコンタクト、質問、そしてジョーク。これらを如何に効率よくまとめて発表するかについての熱心な講義を受け、日頃の自己の講義や、学会における発表との違いを知り、分野が異なり、初めて会う人達に対するプレゼンテーションの仕方を学んだ。発表の練習においては、沢山のKCC教員からアドバイスを受け、英語によるプレゼンテーションをするための自信が付いた。

今まで英語だけの環境下で、英語だけを学ぶ機会は無かった。この研修において、集中して語学力の大切さを知り、今後後の学生指導に活かしたいと考える。

#### 4. 研修成果の教育研究への活用に向けて

現状として弓削商船の学生の英語力はとても低い。これには様々な問題があると考えます。一つは、日本の英語教育が不十分であった事によるものと考えます。中学校における英語の授業は、読み書きが中心であり、英会話教育に時間を十分に使用していない点があると考えます。英語の授業以外で英語に触れる環境にあまりない日本では、読み書きだけによる指導では不十分であり、外国人と話す機会を多く持つためには、会話力を向上させる指導があるべきであると考えます。多少なりとも外国人と会話が成り立てば、英語に対する興味もより深まり、学ぼうとする気力が湧き、必要性を理解できるものと考えます。外国語の基礎、基本は会話であると考えますが、外国人教師の数が少なく、会話指導があまりされず、他の教科と同様に、授業時間内でしか使用しない語学であった事が、語学力の低迷の原因の一つであろう。

二つ目には、外国語の必要性を知る機会があまりに少ない事ではないかと考えます。日本においては、日本語で十分生活できる。外国語を必要と感じる時は、海外旅行に行ったとき、海外と取引のある会社に就職して初めてその必要を知る。必要性を感じない学生は、語学を勉強しようと思わないのは当たり前である。特に、大学入試を経験しない高専生は語学を学ぶ必要性を感じない。

昨年、社船研修において、31日間、飯野海運の外航船に乗船した。今年は、英語研修でKCCにおいて、集中的に英語研修を経験した。この経験を活かして、自己の講義に少しずつ英語を取り入れ、また、英会話の必要性を説き、学生の英語力向上に貢献したいと考える。